
王妃の秘密

睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王妃の秘密

【Zコード】

N3190W

【作者名】

睦月

【あらすじ】

この1年幸せな夫婦だった。だけど、ずっと心の引っかかっている事があった。あなたを騙していること。。。そして、子供が中々出来ない私達の間に側室をという声によつて、私たちの関係は変化していく。

プロローグ

はるか昔、ある国で双子の兄弟による王位争いによつて国が一分する程の戦争が起つた。

き込み多くの犠牲を伴つた。

結局、双子の兄が勝利を納め、その戦争は幕を閉じたが、それ以降王家では双子は戦争を引き起こす災いとされ、双子が生まれた場合には性別を問わず即刻後に生まれた子をその場で処分する事と定められた。

そして、幸いなことにその争い以降現在まで王家に双子は生まれていなかつた。

遡ること18年前。

王家に女の子の赤ちゃんが誕生したとされた。

そして2日後、大公爵邸にも女の子の赤ちゃんが誕生した。

その年はめでたい事が重なったと街中大騒ぎだった

。

01 (前書き)

さて、ひとつ連載が終わりましたので、新たな連載を始めました。
お時間があるときに覗いてみてください。

これだけは・・・・・。
これだけは、あの人に知られてはいけない。

「ジュリア様。支度が整いました」

侍女のエリーナが私を鏡の前に座らせる。

「ありがとうございます。さすがエリーナね。今日もとても綺麗に仕上がっています」

鏡の中の自分を見るとまるで別人だった。

「・・・・・ジュリア様。そんなにお気になさらなくとも宜しいのでは
ありませんか?」

鏡越しに私をみて言うエリーナに私は苦笑する。

「ダメよ。だって、あの人は美しい女性が好きなんだもの」

あの人。

それは、私の夫であり、この国の国王であるクラウス・エルステラ。

「しかし、ジュリア様、ここまでしなくても貴方は十分お綺麗です
わ!」

毎度のことながら、エリーナのお世辞に私はいつも救われる。

「……ありがと。嘘でも嬉しい」

これも、毎度の返事だ。

何を言つても聞かない私に諦めたのか、肩を落とすエリーナにいつもこんな事を言わせて申し訳ないと想いながら部屋を後にする。

エルステリア国、王妃ジュリア・エルステラ。
それが今の私。

1年前、この国に嫁いできた。

4つの大きな大陸があるうち一番大きな大陸コージニア。その中でも一番の大国が我が国だ。

そして、私の祖国はコージニアの中でも最も平和な国とされていた。争いもなく、自然の多い土地だった。そんな土地に来て私を見染めて下さったのが私の夫だ。

だけど、あの時は……。

いけない。またあの時の事を考えてしまった。
もう、結婚した以上ビリしようもない事だもの……。

首を振る私に、エリーナが声をかけた。

「ジユリア様。着きましたよ？」

ふと、その言葉に顔を上げて見れば田の前には重厚な扉。

「国王がお待ちです」

そう言つて扉が開けられた先に私は一人で入つていく。

「クラウス様」

机に向かつて仕事をしている夫に声をかける。

「ジユリアか。そこに座つて待つていてくれ」

そこと言われたのが、いつものソファだと言つ事は心得ている。
これも毎日言われる事だ。

夫、クラウスとはいつも午後のお茶を共にする。
これは別に決まりがあつてしていいるわけではないのだが、新婚当初
私に気を使つてくれたクラウスが誘つてくれて以来、毎日の日課と
なつてしまつた。

「待たせたな」

ふと顔をあげると向かい合つて座る夫の姿。

「いいえ。お仕事ご苦労様です」

クラウスに用意してあつたお茶を差し出す。
それをクラウスはにっこり笑つて受け取る。

こんななんでもない事が今の私には最大の幸せだつた。

「・・・ジユリア」

一口カツプに口をつけたかと思つと、クラウスは俯き氣味に話し始めた。

「近いつか、側室を設けることになるかも知れない」

その言葉に私は一瞬固まつた。

結婚して1年。

夫婦の契りはあるもののなかなかできない跡継ぎに重臣たちが苦言していたことは知つていた。

「・・・そ、そうですか」

なんでもないふりをしたかつたが、さすがに動搖を隠せなかつた。

「これ以上跡継ぎが出来ないのなりばと、じつしても断り切れなかつた。すまない」

クラウスは申し訳なさげに頭を下げる。

「・・・いいえ。謝らないで下さい。私に子供が出来るのが悪いのです」

なぜだらう。2人とも問題があるわけでもないのに子供が出来ないのは・・・。

「ジユリアー私が心から愛しているのはお前だけだ！たとえ側室が来ようと私は側室の元へ渡ることはしない！」

クラウスは私の手を握りそう言つた。

しかし、そんなことが出来るはずがない事はわかつていた。

「・・・お気持ちだけで、私は嬉しいですわ。この国の為に、子供は必要です。私が子を生して差し上げられないのですから、そんな事はおっしゃらないでくださいー！」

本心ではなかつた。

しかし、私たちはただの夫婦ではない。

国を背負う国王と王妃なのだ。

例え、自分の夫が他の女を抱こうとも私はそれを許さなければならぬ立場なのだ。

「・・・ジュリア・・・」

私よりも泣きそうになつてゐるクラウスに苦笑しながら、私たちは恒例のティータイムを終えた。

クラウスの執務室を出ると私はすぐに部屋へと戻る。まだ泣いてはいけない。

どこで誰が見ているのかわからないのだから。

部屋へ戻るまで私は王妃の笑みを顔に張り付けたまま廊下を優雅に歩く。

すれ違う侍女や従者達に笑みを振りまき、その笑顔に悲しみなどにじませずに・・・。

部屋に入ると私はベットにうつ伏せた。

我慢していた涙をぽろぽろとシーツへと落とす。

一緒に化粧まで落ちるものだから、今の私の顔はひどいことだらう。そこに、扉からノックの音が聞こえる。

「ジュリア様？ エリーナでござります。入ってもよろしいですか？」

扉の向こうから聞こえた声はエリーナだつた。

「・・・入室を許可するわ・・・」

エリーナ以外の人にこんな顔は見せられない。

エリーナは私が祖国にいた時から私についていた侍女だつた。

「失礼します。・・・まあまあ。どうなさつたのです？」

私の酷い顔をみて驚いているのか、泣いているから驚いているのか。どちらにしてもさほど驚いてはいないエリーナに私は、先程の話をした。

「・・・そうですか。ご側室が・・・」

それだけ言うとエリーナは目を伏せた。

話をする間、エリーナに化粧をとつてもつらつていた為、再び私は鏡の前に座つている。

「・・・でも、良かつたのかもしれない。これを機に私は王妃の座を降りたほうが・・・」

鏡の中の人物は先程までいた人物とは全くの別人だつた。

「まあ！そんな事ありませんわ！！クラウス様はジュリア様の事を
とっても愛していらっしゃるではありませんか！側室が来られたか
らと書いてジュリア様が王妃を辞める必要がどこにあるのですか！
！」

エリーナはそう書いて、元々私はここにいることが間違っていたの
だ。

それならば、相応しい人がここに来るべきだと思つた。

そう・・・。

すべては1年前のあの日から間違つたばかりに・・・。

「ジュリアー！私たちそつくりだと思わない！？」

姿は愛らしく、声は天使が喋っているのではないのかと間違つほど
透き通つた声で私に話しかけるのは祖国の王女リアーシャ様。

「そんな！恐れ多いですわ！..」

思い切り首を横に振るのが私、トルファ大公爵令嬢ジュリア。

昔から、父に付き添つて王宮へと足を運んでいたため、同じ年のリ
アーシャ様とは仲もよく友達のように接してもらつていた。

「あら！だつて髪の色も瞳の色だつて同じでしょ？それに、私た
ち顔のパーツもそつくりなのよ？」

あかるくにっこり笑うリアーシャ様。姿だけでなくお心まで綺麗な
方。

「リアーシャ様。この國の者ならほとんどが髪の色も瞳の色も一緒
ですわ。パーツは似ていてもお顔立ちが違えばお顔は全然変わつて
きますよ？」

くすくすと笑いながら、楽しい一時を迎えていた。

そこは王宮の一角の庭だつた。

それも王宮の入口に近い・・・・。

遠くでそれを見ている人たちがいたなんて全然気付きもしなかつた。

「あそこにいる可憐な女性たちは誰だ？」

その当初、仕事で祖国に訪ねて来ていたクラウス様が近衛に聞いた。

「ああ、あれはたぶんこの国の王女と大公爵様のご令嬢でしょうね」

その時私たちは花の冠を作っていた。

そして、それを持っていたのはリアーシャ様。

「あの、花を持っている方はどちらだ？」

その時、リアーシャ様は私にその冠を被せてくれた。

そして、近衛はクラウス様に向けていた視線をこちらに向けて言ったのだ。

「あれは大公爵様のご令嬢です」

その時、クラウス様はリアーシャ様に釘付けで、近衛が自分の方を見ていたなど思ってもいなかつたのだろう。

そして、近衛はリアーシャ様の手から私に花冠が移ったところなど見ていなかつたのだろう。

ありとあらゆる偶然で、クラウス様は自分の惚れた相手の名前を間違つて覚えることとなつた。

そして、そのままクラウス様は我が公爵家にやつてきて、私を王妃にと申し出たのだった。

なぜ、それがわかつたかつて？

それは、初めてお会いした時にわかりました。

「……なんだか、庭でお見かけした時とイメージが違つますが
が……」

初対面でそんなことをいうクラウス様もどうかと思うのですが、根
が素直な方なので思わず口から出てしまつたのだろう。

「……いつのお話ですか？」

私が尋ねると、クラウス様は教えてくれた。

それはリアーシャ様とおしゃべりをしていたあの時だと。

そして、手にもつ花冠がとても似合つていた。

私は、リアーシャ様に花冠を被せられ、そのまでいて、というリ
アーシャ様のお言葉通り、王宮に入るまで頭の上に花冠があつた。
そこで、ハツと思つた。

これは、もしかして勘違いされているのではないかと。

他国の王様にそれを指摘するのもどうかと思い私は父に相談したら、
父はそれを黙つていろと言つた。

この結婚で友好関係が築けるのだと。それも、願つてもいない大国
と。

「しかし、王様を騙すことになりますわ！」

父の言つこともわかるのだが、クラウス様が恋い焦がれたのはリア
ーシャ様だった。

「・・・お前はリアーシャ様の幸せを奪うのか？」

父は私を一睨みするとそう言った。

リアーシャ様の幸せ・・・。

その頃、すでにリアーシャ様は想い合っている婚約者がいた。なんだかんだあったのだが、無事2人は想いが通じ今は幸せの絶頂期だった。

「・・・そんなこと・・・」

したいと思う訳ない。

リアーシャ様のあの笑顔を奪うような真似は・・・。

「だが、リアーシャ様の婚約者とエルステリア国の中王。どちらが力が上かわかっているだろう？」

父は暗に私が断ればリアーシャ様の笑顔を奪う結果になることを仄めかした。

そして、私に残された道が一つといふことも・・・。

クラウス様を騙すことはすぐ心苦しかったのだけれども、リアーシャ様の幸せには変えられなかつた。

そして、私はリアーシャ様が言つていたように、似通つたバーツを駆使して化粧でリアーシャ様に近づけるよう誤魔化したのだった。

結婚してからのクラウス様はとても優しかつた。

あの時の女性が私だと思っているからだろうか？

側にいて、私はクラウス様にどんどん惹かれていつた。

そして、この人の妻になれて心の底から喜んだ。

だけど、神様つているんだろうか。

私たちの間には全くと言つていいほど、子供ができる兆候が見られなかつた。

「やはり、悪い事つて出来ないものよね」

事情を知つてゐるエリーナはなんとも言えない顔でこちらを見ていた。

「しかし、クラウス様は現在のジュリア様を愛していらっしゃると思ひますよ?」

エリーナの気持ちは嬉しかつたが、それは違つと私は思つていた。

「そうね、確かにクラウス様は愛して下さつてゐるわ。でも、それはリアーシャ様の真似をしてゐる私を愛して下さつてゐるのよ。つまり、本当の私を愛して下さつてゐるわけではないのよ」

苦笑氣味に笑う私にエリーナは困つた顔を見せた。
エリーナを困らせるつもりじゃない。

だけど、私が耐えられなくなつてきていたのだ。

本当の私ではないジュリアを愛してゐるクラウス様に。
本当の私を見てほしいと思う私のわがままに。

「・・・そんなことないと思ひます・・・」

泣きそうな顔をしてゐるエリーナに私は苦笑する。

「あなたが泣かなくてもいいのよ? これは始めから解っていたことだもの」

「どう。初めから解っていた。

私が彼に惹かれる事も、そして、彼が本当の私を愛してくれないことも。

「だからね、私もそろそろお役御免をしようかと思つたのよ」

リアーシャ様の代わりになる事はもう疲れきってしまった。
そこに新しい側室がくる話。

愛している人の子供がいれば違つたのかも知れない。
だけど、この一年、私のもとに彼の子供が宿ることはなかった。
その上、他の女の人の元に通つて、その人と子供を成す。
そうなつたら、私の心は壊れてしまうかも知れない。
そんなところを見たくなかった。聞きたくなかった。
だから、私は逃げることに決めた。

「・・・しかし、クラウス様が許して下さるでしょうか?」

・・・・そこは頭を抱えるところだつた。
王族の離縁はそう簡単に行かない。
国王となればなおさらだ。
もし、離縁が出来ないのであれば、せめて、この王宮から離れたか
つた。

「とにかく、私、明日話してみるわ」

「……ならん」

内心はやはりと思いながらどうしても肩を落とさずにはいられなかつた。

今日も午後からいつもの通りクラウス様の執務室を訪ね、仕事の合間にお茶をしていた。

「ジュリア、私を信じてくれないのか？」

悲しそうな眼を私に向けてくる。

「いいえ……。クラウス様の事は信用しております。……私がいけないのです。私には側にいて他の女性の元へ通うあなたを見ることができないのです。少しの間で構いません。どうぞ私をフィーナ国の城へ移していただけないでしょつか？」

涙を浮かベクラウス様に懇願した。

離縁を申し出てすぐに許されるなど思っていない。

「……ジュリア……」

クラウス様は悲しそうな顔をしたまま少し考えていた。

「……それならば、1ヶ月……休養という名目で許可しよう……」

「……よろしいのですか？」

1ヶ月。。。期間は短いが、今の私には彼と距離を置くことが必要だった。

「……よくはない……。しかし、いつなつてしまつたのは私の不甲斐なさのせいでもある。ジュリアの心が軽くなるのならばそれもいいだろつ……」

そして、私の隣に座ると、そつと私の手をとつた。

「ただし、必ず私の元へ帰つてくるのだよ？」

その瞳は力強く、人を従える輝きを放っていた。

「……はい……わがままを聞きたくてやつてありがと
い」
「い」

手を繋がれたままそう言つと、クラウス様は私の額へキスを落とした。

「ジュリア。なにがあのうと私はお前を手放すつもりはないからね」

瞼の上ポツリとそう言つクラウス様に私の心がときめいた。

……。」れは、リバー・シャ様に向かって語りて居る事と同じなのに、

それでも、ときめいてしまう私は重傷なのだろう。

「・・・執務中お邪魔して申し訳ありませんでした」

これ以上ここに居たら離がたくなつてしまつ。

私は早々に部屋を後にしようとした。

だが、私が扉に手をかけた時、クラウス様が私の腰を引きよせ強引に唇を奪う。

塞がれた口。

ふと視線を上げると強い瞳と田^タが合^ハつ。

唇が開放されるとクラウス様はニ^ニコ^コリと笑った。

「ジユリア。気をつけで行つてきなさい」

突然の出来事に、つぶやくようにしか返事ができなかつた。そして、私はその部屋を後にしたのだ。

いつもより少し強引な口づけに、思わず私は左手で唇に触れた。

「・・・・クラウス様・・・・」

自然と彼の名前がこぼれる。

ふと、廊下の向こうから侍女が歩いてくるのが見えた。

私は無意識のうちにスツと背筋を伸ばし王妃の仮面をかぶつた。1年。こうして私は彼にふさわしくあろうと努力した。

そしてそれはすでに身についてしまつていた。

私を見つけた侍女はスツと廊下の端によつて頭を下げる。そのたびに思つ。

下^アげられるよ^アうな立場ではないのに。

・・・私なんかに頭を下^アげないで・・・

だけど、こんな事も今日が最後かもしれない。

そう思つと、思わず言葉がこぼれていた。

「こつもい」苦勞様。ありがとうございます」

私から、声をかけられるとは思つていなかつたのだろう。当然だ。いつもならスッと通りすぎるだけなのだから。

侍女は目を見開いて固まつっていた。

そんな彼女がおかしくて、思わずくすりと笑うと、侍女は覺醒したのか慌てて頭を下げた。

「も、もつたひないお言葉・・・」

そう言つた彼女に、感謝の気持ちを込めてこりと笑い掛けその場を後にした。

そして、部屋に戻つた私は早速エリーナと共にフィーナ国へ行くための準備を始めた。

「エリーナ、持つていくものは必要最小限でいいわ。クラウス様から貰つた物は置いていきましょう」

それらを持つて行つてしまつと別れると決めた決心が揺らいでしまうことが目に見えている。

「わかりました・・・しかし、本当にいいのですか?」

「・・・いいの。もともとこは私のいる場所じゃなかつたのよ

荷物をまとめた手がついつい止まつてしまつ。本当はずっとクラウス様と一緒に居たかつた。

「ジュリア様・・・クラウス様に本当の事を打ち明けては・・・？」

エリーナは恐る恐る私にそう提案する。だけど・・・。

「それはダメよ。いくら、クラウス様に求婚されてやつてきたからといつても、私は我が祖国の名を背負つてやつてきたのよ。こんな事がバレてしまつたら国にも迷惑がかかつてしまつわ。私一人の事じゃないもの」

そう、これは誰にもバレてはいけない。

「・・・側室となられる方が素敵な女性であることを願いましょう」

そうすれば、私は離縁を申し渡されるだらつ。子供も成さぬ王妃など必要ない。

「ジュリア様・・・」

目を伏せるエリーナに気付かないふりをして私は荷物をまとめた。

「・・・クラウス様が幸せになる為に私が側にいてはいけないのよ。・・・」

すべては偶然が重なつた勘違いから始まつた。

そのことに便乗して、私はずっと愛する人を騙している。

その上、王妃として一番大切な跡継ぎを産むことすらできない。こんな私がクラウス様の側にいて何が出来るというのだらう。側室が来るという話はきつかけに過ぎない。

そろそろクラウス様を解放して差し上げないといけない。そんな思いがずっと心に引っかかっていたのだ。

「やつと、クラウス様を解放して差し上げられます・・・」

詰め終わった荷物を見て私はエリーナに聞こえないよつ小さな声で
呟いた。

次の朝、まとめた荷物を馬車に積み込むとすぐに城を出発した。

「よろしいのですか？国王様に『挨拶しなくて・・・』

エリーナは心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「・・・いいのよ。ちゃんと言伝はしているわ。彼は忙しいもの。私のわがままに付き合わせるわけにはいかないわ」

それは建前だつた。

クラウス様の顔を見てしまつと決心が鈍りそうだつた。

「・・・ジユリア様」

エリーナは何か言いたそうだつたがそれ以上は言葉にしなかつた。

「やつと着きましたねー」

馬車に揺られる事2週間。エリーナは馬車から下りると思い切り伸びをした。
しかし、すぐに私が下りる為の台を用意した。

「ありがとう」

その台を使って下りる私は、久しぶりに訪ねたフィーナ国の縁の多さに祖国を思い出す。

「結婚してすぐに訪れて以来だわ・・・」

あの時は、エルステリア国に嫁いだばかりで何もかもがすべて新しく、覚えなければいけないことがたくさんあった。嫁いだ身として、祖国に迷惑をかけないよう、エルステリア国に恥をかかせないよう必死でそれらを覚えようとしていた。

そんな私を見かねてか、クラウス様がここへ連れて来てくれたのだった。

「・・・思えば、あれから私はクラウス様に惹かれていたのよね・・・」

うつとりと思い出に浸つてしまい再び胸の奥が疼いた。

「・・・忘れる為に来たのよ・・・」

軽く頭を振り、今までの思い出は心の奥にしまってこんじつかりと前を見つめ、城へ入った。

「ジユリア様。ご到着されたばかりでお疲れでしょうが、明日こちらの国王様の元へご挨拶へと訪れていただきます」

部屋に入るなり、エリーナはそう言った。

フィーナ国の一隅に我がエルステリア国領土があり、この城もそこに立つていてる。

管理はもちろんエルステリア国の者が行つてゐるが働いてゐる者は
フィーナ国の者が多い。

その上、こちらに住むとなると色々と迷惑をかけることになる為、
挨拶はしておかなければならぬ。

「やうね・・・。こちらでしばらくお世話になることですし挨拶には行かなければいけないわね」

エリーナの言葉に同意すると、早速エリーナは明日の謁見許可を頂くべしと、張り切つて部屋を出て行つてしまつた。

今回はまだエルステリア国の王妃としての訪問だ。

「・・・クラウス様の恥にならぬようにしなくては・・・」

いくら、忘れるとはいへ他国との友好関係や施政に私事で迷惑をかけるわけにはいかない。

まだ王妃の立場でいる以上するべきことはやんとしよう。
そう心に決め、今はとにかく田の前の荷物を解くことを始めた。
今回、侍女はエリーナしか連れてこなかつた。
だから、荷物を解く事も出来ることであれば自分でやるつもりだつた。
だが荷物に手をかけた時、扉からノックの音が聞こえた。

「・・・誰?」

エリーナはさつき部屋を出たばかりだ。さすがにこんなに早く帰つてぐることはできない。
ふと、首をかしげながら問い合わせる。

「・・・アルバート・バーンズに御座います」

その名前を聞いて、私は頭の中の記憶をたどった。
いや、そんな事をしなくてすみすぐに思いついた。

「どうぞ」

声をかけ自らの手でドアを開ける。

「（）無沙汰しております。王妃様」

扉の前で深々と頭を下げるのは、エルステリア国第2騎士団団長アルバート・バーンズ。

「・・・アルバートが今回の私の護衛ですか？」

無意識のうちに低くなる声のトーンに自分で驚いた。

「はい。国王様より申し造つて参りました」

・・・・何も、アルバートを寄越さなくともいいだろ（）・・・。
思わず顔をしかめてしまう。

「あなたの様な優秀な方が私の護衛ですか？もつと他の方がいるで
しょう・・・・」

わざわざクラウス様の片腕と呼ばれたアルバートを私につけなくて
も。

「・・・恐れながら国王様はとても心配されておりででした。王妃
様を一人には出来ないと。国王様も時間が取れ次第こちらへ訪れる

「そうです」

アルバートの言葉に耳を疑つた。
クラウス様がここに来る！？

「クラウス様がそうおっしゃつられたのですか！？」

思わず聞き返してしまった。

「・・・・はい。そう伺つておりますが・・・・？」

私の驚きようにアルバートは不思議そうに私を見ていた。
だけど、そんな事が気にならないくらい私は驚いていた。
そんな事をされたのでは、いつまでたつてもこの気持ちに躊躇がつ
けれない。

大体、先日のティータイムの時にそんな事は一言も言つてなかつた。
それに、側室の方はビデオするつもりだらう？
側室を招き入れておいて、その方を放つておくなどありえない。

「・・・・クラウス様は何をお考えに・・・・」

思わず目の前が真っ暗になる。

ふらりとふらついた私をアルバートがすかさず支えてくれた。

「王妃様！大丈夫ですか！？」

「・・・・大丈夫よ。ちょっと眩がしだけ。少し休めば良くな
ります。悪いけど一人してくれますか？」

そう言つと、アルバートは心配そうに私を見ながら一礼してその場

を後にした。

扉を閉め、ベットへ腰かける。

「……そんなに……」

そんなに、リアーシャ様を愛しておられるのだひつか。
それならば、なぜ一皿見て気付かないの！？

どうして、あの時「違う！」と言つて下せらなかつたの！
初めてお会いしたときに、「お前じやない！」そう言つて下せらば
私だつてこんな辛い思つすることなかつたのに……。

「……私、最低ね……」

自嘲氣味に笑う私。

ここ最近ずっとそんな思いが浮かんでいた。
でも、彼が悪いのではない。
リアーシャ様の幸せを願つて私が自ら決めたこと。

エルステリア国を離れてもまだ、心は晴れなかつた。
きっと、昨日アルバートがあんな事を言つたせいだろ？

「ジュリア様…やつと…・・・・・」

鏡の前に座る私をみて、エリーナは涙ぐんでいた。

「泣かないで、エリーナ」

苦笑しながらもエリーナを慰める。

「すみません・・・・・つい、感激してしまつて・・・・・」

エリーナの苦労を思えば感激するのも解らなくないが、そんなに泣く程大変な想いをさせていただろうか？

「・・・・・なんだか、久しぶりに本当の自分の姿を見たようだわ」

鏡に映つてるのはリアーシャ様の真似をした私ではなく、本当の姿の私。

遠くから見る分にはたいして差がないように見えるかもしれないが、近くで見るとやはり今までの自分とは別人だった。

「・・・・やつぱり、リアーシャ様の様な美しさはないわね」

ぽつりと言つた言葉をエリーナは聞き逃さなかつた。

「そんな事ありませんわ！！大きな眼もとには気品が漂い、スッと通った鼻筋は形も良く、思わず口付けしたくなるような唇。お顔全體からジユリア様のお心の優しさが現われていますわ！！」

あまりの勢いに再び苦笑するものの、やはりリアーシャ様の様な美しさはないと思わずにはいられなかつた。

「それに、ジユリア様は綺麗というよりも可愛らしさという言葉がぴったりですわ！」

「……確かに童顔だ。それも、今まで化粧でなんとか誤魔化せはいたが、やはり元の自分に戻ると幼さが残つてしまつ。

「……私ももう18なのに……」

可愛らしいと言われて嬉しくない訳ではないのだが、18ともなれば十分大人で素直にその言葉を受け入れることは出来なかつた。

「さあ、ジユリア様。そろそろ、城を出ませんと約束の時間に間に合わなくなつてしまします」

なぜか、満足したような顔をしてエリーナは扉を開けた。

そんなに、リアーシャ様メイクは大変だつたのかと思つとエリーナに申し訳なく思つた。

エリーナが、（これこそジユリア様の本当の魅力！今まで隠していたのがもつたない！男と言う男がジユリア様にメロメロよー）と思つてゐる事など露知らず……。

「……エリーナ、ごめんなさいね……」

こつそりと謝罪した言葉は、浮かれていたリーナの耳には届かなかつた。

「ご無沙汰しております。トレー・ス陛下」

目の前の王座に座っているフイーナ国国王に頭を下げる。

…・・・・・ジニア歟？

様子を伺い、二、私を見る國王に思わず苦笑してしまひ、

-
は
し

返事をした事で、改めて私を見る国王は少し驚いた様な顔をしていました。

「・・・しばらく会わない内になんだが随分雰囲気が変わられましたね？・・・いや、驚いた。すごく素敵だ」

王座から下りて私の傍まで来ると、トレース陛下は私の左手甲に口づけを落とした。

エルステリア国では既婚女性にこの様な挨拶をする事はない為、思わず身を固くしてしまった。

「ぐ、陛下！」

「ああ、失礼。あまりに可愛らしかったので思わずこの手に触れたくなってしまった。確か、エルステリア国ではあまり良しとしなかつたね」

そう言いながらもなかなか離してくれない左手に思わず視線を落とすと、そこに唇をあてたままでこちらを見るトレース陛下と田が合う。

「お戯れがすぎますわ・・・。私は」ときにこの様な事をなさっては、陛下にご迷惑がかかります・・・」

こんな子供の様な私にこんな事をして、陛下が幼子好きなんて噂されでは大変だ。

確か陛下のお年は今年で35だ。

リアーシャ様を真似ていない私などせいぜい15、6にしか見えない。そんな子供にこんな事をしたと知れば迷惑がかかつてしまう。私は慌てて、トレース陛下から手を引こうとした。

しかし、唇は離れたものの陛下が手を離してくれる気配はなかった。それどころか、手を引こうとした私の手を更に強く握ってきた。

「と、トレース陛下？」

声をかけると、トレース陛下はこり笑顔を作った。

「・・・ジユリア殿。いや、失礼。ちょっとからかいすぎたかな

?

そういうと、ぱつと手を離し、元いた王座へと戻つていく。
からかわれただけだと知ると、ほつとしたと同時にそれに慌てた自分が恥ずかしかつた。

「……それで、今回まじめられたのかな？」ひらへはじめへりい
滞在する予定かな？」

トレース陛下からの質問にハツとし、気を取り直して陛下の質問に答えた。

「はい、今回は休養の為、1か月ほどいらっしゃりでお世話になります。その間、フィーナ国の方々にご迷惑をおかけする事となるでしょうが、宜しくお願い致します。」

ドレスを摘み淑女のだしなみとして翻つた礼をする。

一 休養?どこかお加減でも悪いのか?」

「いえ・・・・、少し王妃業をお休みいただいているだけです。お恥ずかしいお話です」

体の調子が悪いとも言えず、ましてや離縁する為に来ましたなど言えるはずもなく、おかしくないような言い訳も見つからず、王妃としてあり得ない様な理由を言つてしまつた。

「ははは！ そうか。そうだな。たまには王妃業も休業しないとやつていられないからな！」

あまりにおかしい理由を笑い飛ばしてくれたトレイス陛下にほつと胸をなでおろした。

しかし、こんな事を言つてしまつてクラウス様の恥にならないだろうか・・・。

そんな思いがふつと過つた。

「では、ジュリア殿。よろしければ明日夕食と一緒にどうかな?」この国の名物を用意しよう

トレイス陛下の言葉に我に返ると、あまり気がすすまないながらも無下にお断りする事も出来ず了承してしまつた。クラウス様に離縁を納得してもらつ事を考えなければいけないのに・・・。と思いながら、思わず零れそうな溜息を飲み込んだ。

昨日の登城後は疲れて、片付けが出来なかつた。

今日は今日で夕方からまた王城へと出向かなければいけない為、朝からまだ片付いていない荷物をエリーナがせつせと片付けていた。そんな、忙しく動き回るエリーナの手伝いをしようとエリーナに何度も声をかけているのだが・・・。

「・・・エ、エリーナ。私も何か手伝えることは・・・」

最後まで言わないうちにエリーナに言葉を被せられた。

「ジュリア様は大人しく座つていらしてください」

「・・・はい」

にっこりと笑うエリーナの言葉に頷くしかなかつた。
だけど、エリーナ一人に働かせるのは心苦しい。

「そうだわ！お茶の準備くらい・・・」

私の言葉を聞くや、クローゼットにいたエリーナが慌ててそこから出て來た。

「ジュ、ジュリア様！お茶なら私が！！お願いですから、大人しくそこに座つていてください！！」

なんだか、泣きそうな声でそういうエリーナに思わず首を縦に振ってしまった。

それを見たエリーナは心底安堵したように笑顔をこぼし、窓際にあるソファーに腰をかけるよう勧めた。

ソファーに腰をかけたものの、せわしなく動くエリーナを見てやはり何かできないだらうかと思案してしまつ。

「……エリーナばかりに負担をかけてしまつて申し訳ないわ。私も何か手伝いたいのだけれど……」

しかし、あれもしなくていい、これもしなくていい、と言われ私はすることが何もなかつた。

そして、そんな姿をちらつと横田で見るエリーナの心中は、

（ジュリア様に家事をさせよつものなら、わざに負担がふえてしまつ……）

そう思つと思わず背筋が凍えるエリーナ。

ちらつと主を見ると何かを考え込む仕草をしていた。

（い、いけない！とにかく、ジュリア様には違つことをしてもらつて氣をそらさなければ……）

エリーゼは慌ててお茶を入れると、そばにあつた本の入つたカバンをひっくり返し、ジュリアが興味を持ちそうな本を取り上げるとお茶と一緒にそれを差し出した。

「ジュ、ジュリア様？ ゼひ、これをお読みになつてお待ちください」

必死で平常心を保ちながらいつもの笑顔で話しかけた。

「まあ……でも、エリーナが働いているのに私が本を読んでる

なんて・・・」

「いいえ！－－これはただの本ではありません－－離縁に関してつづられた本なのです－－どうぞ－－ジュリア様はジュリア様のなさるべき事をなさつてください！私もこれが侍女としての仕事ですかう－－」

そう言つて、私は渡された本に目を落とした。

『コレで離婚問題もバツチリ！』

・・・・・どうしてこんなものが・・・。

ちらりとエリーナを見たが、エリーナはせつせと荷物をクローゼットへと運んでいた。

ひとつため息をつき、とつあえずページをめくつてみた。

するはどうだらう。

例として挙げられている夫婦のさもありまな不満や問題に私は思わず目を丸くしてしまった。

『夫の浮気癖がひどく別れたいのですが慰謝料は頂けるでしょうか？』

そ、そんな、そんなことで別れるの？だったら、側室を持つクラウス様は間違つているとでも・・？
いいえ！そんなわけないわ！だつて、世継ぎがいなければ世継ぎ争いが起こってしまうじゃない－－
王室内で争うなんてあつてはならないことだわ！

思い切り首をふつつ、このページは参考にならないといきなりに先に進んだ。

『夫の暴力がひどく耐えられません。だけど、生活費もすべて夫が持つていて離婚しようにも離婚後生活していくかどうかが不安です』

暴力はいけないわね・・・。でも・・・生活のお金のことなど私が考えたことなんてないけれど、それが普通なのではないかしら？ドレスや宝石を買うのは別にしても、何をするのだってクラウス様の許可が必要だわ。でも、そうしなければ湯水のようにお金を使う者も出てきてしまうかもしれないし。管理することは当然だわ！

これも、参考にはならないと更にページを進める。

『夫のたびかさなる嘘にたえられなくなりました。これで離婚はできるでしょ？』

ドキリとした。

クラウス様が嘘をついているわけではないけれど、私がクラウス様に嘘をついているようなものだ。

先を読み進めると、この本の著者であろう人物がその質問に回答していた。

私は、その回答の一部に目が止まった。

『夫婦といえども、所詮赤の他人。隠し事のひとつや一つはあるでしょう。嘘をついた事を責める前に、どうしてそのような嘘をついたのかよく話し合ってみてはいかがでしょう？それでも、許せないと感じるのであれば離婚も仕方ないのかも知れません。』

・・・・話し合いなど出来るわけがない。

こんな事がバレてしまつては困がどくなつてしまつかる……。
それならば、黙つて離縁した方がよっぽどマシだ。

「…………それに……」

私はきっと嫌われてしまつだらう。

そう思つと、言葉にならない言葉で胸が張り裂けそうだつた。

「ジュリア様……？」

のめり込むように読んでいたその本から田をあげると、エリーナが声をかけてきた。

とても心配そうに……。

その声色に、ハッとして無理やり笑顔を作つた。

「…………エリーナ。ありがと。とても参考になつたわ」

そう言つて、その本をエリーナに返した。

エリーナは何か言つたそな顔をしていたが、そのまま本を受け取るとそれを戻しに部屋を出て行つた。

「…………」のままでこかへ行つてしまつ方がいいのかしらね……。
・

ぽつりとつぶやいた言葉は、少し考えていたことだつた。

この城を抜け出して、姿をくらませる。

だけど、それをしてしまつと多くの人に迷惑がかかつてしまつだらう。

そう思つと、実行することは難しかつた。

「……やはり側室の方に、お子を身につけて貰つて、その方を正妃にするよりこしてもううしかないわね……」

それには、兎にも角にも側室の方がお子を宿さなければ話にならない。

時間があれば、これからに来られるとおっしゃっていたが、それを思い留めるようこちらからもお願ひしよう。

「こんな事を書かなければいけないなんて……」

側に置いてあつた紙とペンをとり、初めてクラウス様宛に手紙を書いた。

こちらへは来られるよりも、王宮に上がられたばかりの側室の姫君を気遣つて差し上げてください。きっと心細い思いをされているでしょつから。と……。

書き綴つているうちに、紙にぽたりと雫が落ちた。

「馬鹿ね……。最初から本当の事を話しておけばよかつたのよ……。今さら泣くなんて虫がよすぎるわ……」

落ちた涙をシミにならないよう綺麗にふき取ると手紙を封筒に入れだ。

そして、エリーナからアルバートへと手紙は渡され、アルバートはその日のうちに手紙をもつて城へ向かった。

6 (後書き)

最後、少し手直しをしました。
話の都合上です(^-^)

「ジュリア殿。本日はわざわざ足労こただいてすみません」

「いーいー。じーじーお招き戴きましてありがとござります」

夕方、再びフイーナ国の王宮へとやつて来た私はトレース陛下と向かい合わせに座つていた。

「今日も素敵ですね」

いつもと笑うお姿は威厳と自信に満ち溢れていた。
まさしく國を背負つてたつ男という感じだ。

「ありがとうございます。でも、お忙しこでしょ」わざわざの様な席を設けて頂いて宜しかったのでしょうか・・・

クラウス様はいつも夕食もそこそこに仕事に戻つてしまつ。國を支える者としてやらなければいけない事がたくさんあるのだろう。

それなのに、他国の私が突然訪問してしまつたものだから迷惑をかけているのではないか心配だった。

「ああ。もちろんだよ！私にこんな素敵な女性と夕食を共にできるなんて私は幸せ者だね」

陛下はお優しい。

「もつたいないお言葉ですわ」

ペコリと頭を下げるが、くすりと笑い声が聞こえる。

「そんなことはないわ。君が結婚していなかつたら私の妻にしたいくらいだ」

その言葉に顔をあげると思わず息が止まりそうだった。
声色や言葉のトーン、表情はとても穏やかで優しいのに、陛下の目
は真剣にこちらを見つめていた。
思わず背中がぞくつとした。

「・・・そ、そんな。トレース陛下の様なお方なら私の様な小娘では
なくとも、綺麗な女性たちが放つておかないでしょ?」

多少顔が上ずつてしまつたが、なんとか言葉をつなぐ。
私の言葉に、陛下もいつもの表情に戻つた。

「・・・そんな事ないよ?君みたいな可愛いお嫁さんが早く来て
ほしいものだ。なんて、こんな事を言ついたらクラウスに怒られ
るかな?」

陛下の冗談にほつと胸をなでおろした。
そして、その言葉にふと思つ出した。

「・・・やう言えば陛下とクラウス様は仲がよろしくんですね?」

「ん?・・・ああ。そうだね。私たちが幼い頃はお互に国を背負つ立
場としてあちこち勉強に行つていた。その際に、クラウスとも何度
か一緒になつてね。兄のように私を慕つてくれているよ」

「まあ…そつだつたのですか？ふふ、お2人とも小さい頃からさぞかし優秀だったのでしょうか？」

陛下とクラウス様の小さい頃を思い浮かべると思わず頬がゆるんでしまう。

「いや、そんな事ないよ？私もクラウスもよくケンカをしていたよ。討論していたはずなのに、熱くなるとお互い一歩も引かなくてね。ああ、そういう、あれはいつだったかな？女の子を取り合ってケンカしたことある？」

陛下は幼いころの思い出を楽しそうに語つてくれた。
だけど、陛下の言葉に私は思わず胸が痛んだ。

あの温厚なクラウス様がトレース陛下と取り合ひへり心を許した女性がいたなんて……。

いくら、幼いころの話とはいえ心が痛むのは押さえられなかつた。

「……その女性とは今でも……仲がよろしいのですか……？」

思わず口から勝手にこぼれ落ちた言葉に分自身が驚いた。

「ん？ その女の子かい？んー……それが、私はあまり覚えていないくてね。たぶん、どこかの貴族の娘だったとは思つんだけど、それが誰だつたかは覚えていないんだ」

陛下が一いち覗を見て申し訳なさそうに笑つた。

「そうですか……」

陛下の視線に気づくこともなく、素直に感情をだして落ち込んでし

まう私に、向かい側から苦笑の様な笑い声が聞こえて、はっと顔をあげた。

「あー申し訳あつませんー！」

「こやこや。そんなに気にしなくても、昔の話だからね。クラウスも忘れてると思うよ」

陛下にフオローされてしまった。
情けなれに思わず顔が下を向く。

「わあ、昔話はこれまでにして料理をいただこうー。」

田の前にはフイーナ国特産の食材で作られたメインディッシュが置かれていた。
陛下の心配りにこいつひとつと笑つて答え、田の前の料理に手を伸ばした。

心の中では、昔のことだと解つていながらも、どうしてか気になつてしまつその子を心の隅に追いやつて。

「それで、王妃業を休む為と書つていだが、何か辛い事でもあつたかな？」

皿の上の料理がなくなると、次はデザートが運ばれてきた。
それと同時に陛下が口を開いた。

「いいえ。辛いことなどありませんわ。クラウス様にも、国の者にも良くして頂いております」

「ひとつとやう答えた。

「ふふ。即答だね。まるで答えが用意されていたみたいだ」

陛下の言葉に思わず眉を潜めた。

「……陛下。試されたのですか？」

自分が思っているよりも低い声が出てしまった。

「いやいや。とんでもないよ！そんな怖い顔をしないでくれ。何か悩みがあるなら相談に乗りたかっただけだよ。弟の様なクラウスのお嫁さんだ。私にとつては妹みたいなものだからね。まあ、力はあちらが上だけだ……」

おどける陛下に私は少し肩の力を抜いた。

「……ありがとうございます。でも……本当に何でもありますせんわーお心づかい感謝致します」

これ以上何も聞いてくれるな。そんな思いを込めて精いっぱいの笑顔でそう答えた。

「……まあ、ジユリア殿がそうこうならあまり聞かない事にしよ。でも、何かあつたらいつでも私のところへ来なさい。力になると」

セツコヒと陛下がトザートに口をつけ、フィーナ国特産の果実で造ったそのトザートの説明を始めた。

（よかつた。これ以上聞かれたらなんて答えていいかわからなかつたもの……。）

危うく、IJの想いを陛下に打ち明けるところだつた。
でも、それほどまでに私の心はギリギリの所までできている事を知つた。

（もう少し大丈夫だと思ったのに……。早めにクラウス様から離れて正解だつたかもしれない。）

陛下の言葉はあまり頭に入つてこず、私は時々相槌を打つだけだつた。

陛下と夕食を共にしてから、しばらくは平和な日が続いた。

「心安らぐわ・・・」

こんな天気のいい日は庭でランチにしましょう。
と言う事で、今日はエリーナとともに庭で昼食を取つていた。
周りは緑に囲まれ、庭には季節の花々が咲いている。
遠くでは鳥たちのさえずりが聞こえ、太陽の暖かい日差し。
それらに包まれながら昼食を取るなんて、いつ振りだらう。

「まだ、イングランシャにいた頃以来かしらね

我が祖国イングランシャ国。

とっても緑が多く、天気のいい日にまよへりやつてエリーナとお茶をしていた。

「そうですね。あの頃はまさか他国にジュリア様が嫁ぐとは思つておりませんでした。・・・でも、そのおかげで私もこうして未だにジュリア様と一緒にられますけどねー」

「ひひりと笑うエリーナを見て、心が温かくなる。

「・・・そうね。私もまさか他国に嫁ぐなど思つていなかつたわ。
いくらお父様が大公爵とはいえ、王族でもない私がこんな大役など頂ける身分ではないものね」

そう、クラウス様が我が家に求婚に来なかつたら、大人しく同じ貴

族の方と結婚していただろう。

他国の王族へ嫁ぐのは王族からと決まっていた。王族から嫁ぐ娘がない場合は貴族からとなつてはいるが、まだ未婚の王家の娘がいるのに、それを差し置いて公爵家の娘が嫁ぐ事など、本当ならありえなかつたのだから。

「・・・・ああ！ダメね！せっかくこんないいお天気なのに暗い事を考へているなんて！」

この結婚は全てが間違つていたのだ。

そんな事を考へているとどんどん気持ちが沈んでいく。だから、気分を変えようと空を仰いでみる。

「そうですよ！せっかく庭に出てきたんですから、少しあ庭を歩かれて見てはいかがですか？」

そんな私にエリーナは答え、私は頷き庭の散歩道へと進んだ。周りの草花は太陽の光に照らされて生き生きと咲き誇つている。少し太陽の光が強い感じはするが、陽の光によつて私も少し元気がもらえた様な気がする。

。 だけど、穏やかな日つてそんなに長くは続かないものなのね・・・。

1週間前に、アルバートに託した手紙の返事を持つてアルバートが

城へ戻ってきた。

その知らせを受け、その日から私は再びリリアーシャ様の姿へと戻つた。

クラウス様に近いアルバートの前では本当の姿をさらす訳にはいかなかつた。

「ジュリア様。陛下よりお返事を頂いて参りました」

そつと差し出した手紙を私は受け取る。

すると、もう一通アルバートは渡しにくそうにそれを差し出した。

「…………それから、いきなり…………招待状になります」

「招待状？」

夏も終わり秋の気配が深まってきた今日この頃。

しかし、まだ夜も寝苦しい日々が続き、舞踏会やパーティなどの季節には少し早い。

首をかしげながら、その招待状の封を切つた。

「ご側室歓迎に伴う舞踏会開催の」招待へ

それを目にした私は思わずアルバートを見てしまつた。

その視線をそらすかのように下を向くアルバートについつい溜息をついてしまつたのは許してほしい。

そして、もう一通の手紙の封を切つた。

『親愛なるジュリア

君からの手紙とても嬉しかった。ただ、内容はあまり嬉しくなかつたけれどね。

さて、本題に入る前に君には謝りたい。
この様なものを君に渡さなければいけない事を本当に申し訳ないと
思つ。

そして本題だが、側室を迎える際には必ず歓迎の意をこめて舞踏会を行つのが我が国の仕来たりだ。

正妃の場合は結婚式を行つが、側室にはそれは行わない。側室だから当然と言えば当然なのだが、代わりに舞踏会にて側室を迎える宴を開くこととなつてゐるのだ。

そして、そこに正妃として君も出席をして欲しい。

ただ・・・、今回のパートナーとして私は君と出席する事が出来ない。

君のパートナーとして、アルバートと共に一緒に出席してくれ。

私の心はいつも君にある事を忘れないで。

舞踏会で会えるのを楽しみにしてるよ。

愛をこめて

クラウス

その手紙を読み終えた時、私の心の中で何かが壊れる音がした様な気がした。

そして再び、アルバートを見ると今度はしっかりとこちらを見ていた。

「申し訳ございません。私の様な者がパートナーで……」

頭を下げるアルバートにつりと笑いかける。

「いいえ。私の方こそ、この様なパーティが苦手なあなたにパートナーを頼んでしまう事になつてごめんなさい。それに、気まずいでしょうに……」

パーティでの私の立場を考えると、アルバートが可哀そつた。

「いいえ！私は何があつても貴方様をお守り致します」

なんだが、噛み合つていらない様な答えに思わず苦笑する。

「ありがとうございます。では、早速用意をしなければいけないわね。アルバート、貴方は疲れているでしょ？から、ゆっくり休んで。御苦労さま」

そう言って、アルバートを下がらせると、エリーナを呼んだ。

「エリーナ。申し訳ないけれど、新しいドレスを仕立てる用意をして頂戴」

ドレスだけではない。新しい靴も、アクセサリーも準備をしなければいけない。

そんな事を考へていると、エリーナが傍にきて顔をひきつらせた。

「ジュ、ジュリア様？どうなさつたのですかー？」

慌てて私に駆け寄るエリーナに、私は首をかしげる。

「どうしたの？私は別に何ともないわ。さあ、舞踏会の準備をしま
しょう。」

につじりとエリーナに笑いかける。

だが、エリーナはどんどん泣きそうな顔になつていつた。

「ジュリア様……。一体どうされたのですか！？今のあなたは、王妃の仮面をかぶつておられますわ！！」

王妃の仮面?
そんなものをかぶつているつもりはない。

「そんなに、お心を乱したお手紙はなんと書いてあつたのですか?」

おろおろするエリーナに、クラウス様からの手紙と招待状を見せた。その手紙を見るなりエリーナの手がどんどん震ってきた。

なんなんですか！！これは！！」

怒っているのに目からは涙があふれ出しているエリーナ。

「クラウス様は、一体何をお考えなんですか！！！ジュリア様の事を想うのでしたら、欠席させるべきでしょう！！」

手紙に向かって文句を言つてゐるエリーナに苦笑しつつ、私はその手紙をエリーナの手から抜き取つた。

「エリーナ。これは、この国の仕来たりだそうよ？それでしたら、

私が出ないなどあつてはならない事でしょう。まあ、涙拭いて。舞踏会に出席する為の準備をしましょ。」

「ジュリア様！そんな仮面をかぶつていないと血身を保てないくらいなのよ、どうして、ここまでおられるのですか！？」

ヒーナの言葉に溜息を吐き私は言った。

「私は、まだこの国の王妃ですもの」

舞踏会はちょうど私たちが休養を終える予定の3週間後。もつ、何も考えたくなかつた。

8 (後書き)

話の都合上、少し手直しをしました。

招待状を受け取つて以来、舞踏会の準備に追われていた。

新しく作るドレスの採寸。デザインの打ち合わせ。

装飾類の選別。ダンスの練習。

気づけば、あと3日でここを去らなければいけない。

その間、傍ではずっと心配そうにしているエリーナに思わず苦笑する。

「エリーナ？ 私は大丈夫よ？ 貴方の方が今にも倒れそうで心配だわ。私の事はいいからゆつくり休みなさい」

「いいえ！ 私はジュリア様のお傍を離れられません……」

このやり取りももはや何度目だろ？

何度も言つても、私の事が心配だといって傍を離れようとしない。

溜息をつきつつ、そんなに思つてくれる事に少し心が満たされる。しかし、何かをしていいないと考えたくなくともクラウス様と側室の姫が寄り添つている姿が頭に浮かんで来ては今にも取り乱してしまいそうになる。

こんな事で本当に舞踏会に参加できるのだろうか……。再び深いため息をついた時、扉からノックの音が聞こえた。

「失礼します」

対応いでたエリーナの向こう側からアルバートの声が聞こえた。ダンスの練習はもう終わつたはずだったが、何の用だろ？ そう思つてみると、アルバートが部屋へと入ってきた。

「失礼します。ジュリア様。至急お伝えしたい要件がござります」

私の所に持つてくる至急の要件？
その言葉になんだか嫌な予感がしたが、アルバートに先を続けるよう促す。

「はい。・・・実は、エルステリア国の国境近くで以前より問題となつておりましたダルン団との争いが大きくなり私の指揮致します第2騎士団もそちらへ赴くようにと国王より仰せつかりました」

「・・・それで、舞踏会のパートナーとして参加できないと言つ事ですね？」

アルバートの言いたい事はそれだつたのだろう。
先を見越して私の方からそう告げた。

「・・・申し訳ありません」

何一つ言い訳も言わず頭を下げる。

いや、国王からの仰せであるのならばそれが最重要事項だ。
謝る必要すらないのに、本当に申し訳なさそうに頭を下げるアルバートに顔を上げさせた。

「アルバート？顔を上げて下さい。私は構いません。それよりもしつかりと国を守つて下さい。それが、あなたの仕事ですから。ただし、『自分の命もくれぐれも大事にして下さいね』

国王命令だというのなら仕方がない。

何より民の為にも争い事は早く治めて欲しい。

そう思いアルバートに気にしなくていいと告げたつもりだった。それなのに、そう言つた途端アルバートの表情は強ばる。

「…………本当に、申し訳ございません……」

先程よりも深く頭を下げるアルバート。

そんなに、気にしなくてもいいのに……。と思いながら、締められた扉に両をやつた。

「だけど……。パートナーなしで舞踏会に赴くのはやはりまずいわよね……」

決してこちらに意図はなくとも一人で出席するとなると、周りにどう思われてしまうかわからない。

側室を認めて居ないのだと思われるかもしれない。

それか、興味もないなどと思われてしまうかもしれない。

どちらにしても、クラウス様にとつていい方には転ばないだらう。

「困ったわね……」

アルバート以外にパートナーとして連れて行こうとするとまた色々と考えなければならない。

正妃として連れていてもおかしくない方。

何かしらの関係を疑われる事のない方。

ふと、思い浮かんだ人物がいた。

・・・エルステリア国にとつて大事な方。

「いえ……。ダメよ。お忙しい方だもの……」

頭の中からその方を消そうと首を振った時、ノックの音と同時にエ

リーナの声が聞こえた。

「ジュリア様。エリーナでござります。フィーナ国より使者が来られています」

今まさに頭から消そうとしていた人物の国の名を聞いて再び色濃くその方が思い浮かんだ。

「入室を許可します。はいりなさい」

そういうと、エリーナと共に、フィーナ国の騎士服を纏つた男が部屋へと姿を現した。

「フィーナ国国王様よりジュリア様に事付けを預かって参りました」

頭を下げる騎士に先を促した。

「今度開かれますエルステリア国での舞踏会につきまして、ジュリア様のパートナーがお決まりでないようでしたら、ぜひ我が国王と一緒に参加して頂けませんでしょうか?」

あまりのタイミングのよさに思わず目を丸くしてしまった。

「え・・・ええ。御迷惑でないのでしたら、一いちからもお願ひ申し上げたいのですが・・・・・」

いきなりの事で戸惑いを隠せない。

トレース陛下であればエルステリア国の王妃としてパートナーを務めても問題ない。友好国の国王と出席する事はむしろクラウス様にとってもプラスに繋がるだろ?。

だけど、あまりのタイミングの良さに何か引っ掛かるものがあった。しかし、パートナーのいない今はとてもありがたい申し出に首を縊に振るしかなかった。

「つきましては、色よいお返事が頂けた場合にこいつをお渡しするよに」と預かつて参りました」

騎士から渡された箱の中には、大きな赤い石を真ん中に周りには小さいながらもキラキラと光るダイヤがちりばめられているネックレスが入っていた。

「い、こんな、高価な物は頂けません……」

この大きな赤い石は『レッドベリル』ではないだろ？ またの名をレッドエメラルド。すぐ希少価値の高いものだ。

慌てて騎士に返すが、騎士も困った顔をしてそれを受け取らない。

「受け取つて頂けなければ、その場に捨ててこいと申し遣つております。私としても受け取つて頂きたいのですが、受け取つて頂く訳にはいかないでしょ？ うか？」

弱つたよにやうづ言われてしまつては受け取らなければいけない様に思えてくる。

「……わかりました。……トレー・ス陛下に感謝の意をお伝え下さい。後日改めてお礼に伺わせていただきます」

本意ではないが、あまりの騎士の困り様に可哀そうになつた。それを聞いた騎士は、正反対にぱあつと明るい顔をした。

「「えー！ そうおっしゃるだらうとの事でしたので、お礼はそれを身に付けて一緒に参加してください。とのことでした！！」

明るくそう言い放った彼はスキップをしそうな勢いで部屋を後にした。

最後は、しっかりと舞踏会前にお迎えに上がりますと言い残して・・・。

騎士を見送つて戻つてきたエリーナは、ジュリアの手の中にあるそれを見て深いため息をついた。

「はあ・・・・・。ですが、トレース国王様ですね。あのような若い騎士にこれを持つてこさせ、受け取らなければ捨てろだなんて、ジュリア様のお心の優しさを見越していらっしゃったんですね」

呆れたようにそうこうエリーナ。

「やはり・・・・・舞踏会で着けなければダメよね・・・・・

そう言われたのだからそつなのだろうが・・・。

「そうですね。幸いドレスのデザインにも不釣り合いでありますよんし、着けて行かれた方が宜しいと思いますよ」

2人して深いため息が出た。

クラウス様からの贈り物以外を身に付けて舞踏会へと参加しなければいけないなんて。

手の中にはキラキラとその存在を現すかのように光っているそれを見つめて、思わずため息が溢れた。

3日後。

1か月前と同じように少ない荷物を馬車に乗せ、リアーシャ様の格好をした私が馬車に乗り込んだ。

本当の姿でいられる時間は終わってしまったのだ。

その上、国に戻つたらクラウス様の側室の方と嫌でも会わなければいけない。

「さあ、出発しましょう」

あれ以来、私の顔はつねに微笑を保つている。

鏡を見ても完璧だと自分で思つ。

王妃としての役目はしっかりと果たせるだらう。

馬車に揺られながら、窓に映る自分の姿をみて溜息がこぼれる。

「・・・溜息ばかりですね」

ぽつりとつぶやくリーナの声は私には届く事無く、2週間馬車に揺られ続けた。

エルステリア国に到着すると、町の雰囲気は変わらず活気づいていた。

「・・・・戻ってきたのね」

窓の外を流れる景色ははいの1年で何度もみた景色に変わつて來ていた。

「はい。まもなく城に到着しますよ」

向かい側でにっこりと笑うエリーナに私も頬笑み返す。
城の近くまで来ると、本日舞踏会に招待されている密であるう馬車
がひしめき合つていた。

「これでは立つてしましますので、裏門から入つても宜しいでし
ょうか?」

エリーナの問いに私は頷き、彼女は馬車の外へと声をかける。
他の馬車を見送り、裏門の方へ回るとそこでは侍女や従者たちがあ
わただしく今日の準備をしているようだつた。
そんな中、その場に相応しくない馬車の到着に彼らは動かしていた
手を止めた。

「・・・到着いたしました。足元にお気を付け下さい」

その言葉の後、馬車から下りて現われた私に、彼ら達は驚きの表情
を見せながらも頭を下げる。

そんな姿を見て、慌てて口を開いた。

「皆さん。私の事は気にせず、仕事に戻つて頂戴。突然邪魔をして
しまつてごめんなさい」

彼らにとつては、王族に会えば当然の事をしただけなのだが、思い

もよらず王妃からそんな言葉を貰つた事に皆驚き、固まってしまった。

いつもならば、威儀を保つために当然の様に通りすぎていた事をすっかり忘れていた。

しかし、それに気付いたエリーナが慌てて声をかけた。

「さ、さあ、ジュリア様。お部屋に戻つて、舞踏会の準備を急いで行わなくては間に合わなくなります。」

そういうとその場を後にし、エリーナに連れられ自室へと向かった。部屋に向かう途中、クラウス様に挨拶をしなくてはと思つたが彼も準備で忙しいでしようからと侍女に止められ、そのまままっすぐ部屋へと戻つた。

1か月ぶりの自室は塵も埃も見当たらない。

主が留守にしていたなど嘘のよつにいつもの景色が広がつていた。

「さあ、ジュリア様あちらで頼んでいたドレスが届いています。こちらに着替えましょ。」

溜息をつく暇もなく部屋に着くなりエリーナと他の侍女たちにドレスを脱がされ、着替えさせられる。

コルセットをギュッと締められ、ネイビーのドレスに身を包んだ。あちらで頼んでいたベアトップのロングドレス。胸元にはクリスタルがちりばめられ、腰の部分がキュッととしていて大きなリボンが付いていた。そこから徐々に広がつていくドレスはとても上品に見える。そして、胸元にはトレース陛下から贈られたネックレスが着けられる。

ネイビーのドレスに深い赤の宝石はまさにぴったりだった。

「・・・・まるで合わせて作られたみたいね・・・」

思わず苦笑してしまった。

着替えが終われば、鏡の前に座らされメイク、髪のセットと徐々に作り上げられていく。

「出来ました」

後ろから声がかかり、田を開けると鏡の中にいたのは大人の雰囲気を纏つたリーアーシャ様にそつくりな自分が王妃の仮面をかぶつてそこに座っていた。

「…………ありがとう。素敵だわ」

「…………ほう…………。素敵ですわ。ジュリア様」

鏡越しにうつとりと私を見ているエリーナに思わず苦笑した。以前に戻った感じがしたからだ。

「また、リーアーシャ様のお姿だもの。あの方の様にはいかないけどね…………」

心の美しさが違う。

そう思つた。

その言葉にエリーナが何か言おうとしていたが、扉からのノックの音にエリーナの言葉が発せられる事はなかつた。

「…………ジュリア様。トレース陛下の使いの者が参りました」

ノックの音は迎えが来た事を告げていたらしい。
思わず息をのみ、鏡を覗き込んだ。

（貴方は王妃。クラウス様に相応しくある様に努めなさい。大丈夫。
上手くやれるわ）

心中でせう自分に言い聞かせると扉を瞑り深呼吸をした。

「・・・ジユリア様」

再び呼ぶエリーナの声に扉を開けその場を立ちあがると、扉の前で待つ騎士とエリーナとともにトレース陛下の待つ控室へと向かった。

「ジユリア殿・・・」

舞踏会の行われる広間前のトレース陛下の控室にて陛下と謁見する。

「お久しぶりでござります。トレース陛下。先日は大変お世話になりました」

扉を開けその部屋へ入ると腰を落とし挨拶をする。

「それから、このような素敵なネックレスを頂きありがとうございます。お礼が遅くなってしまい申し訳ありません」

胸元にきらつと光るそれの礼を言つと、頭の上からくすりと笑う声が聞こえる。

「いいや、着けてきてくれて嬉しいよ。とても似合つていて。こちらこそ、急にパートナーを頼んでしまって申し訳なかつたね。パー

トナーを探していたときにクラウスから君と参加しない事を聞いて、それならと思つて誘つてしまつたんだが、迷惑じやなかつただろうか?」

胸がズキリと痛むが、表情には出さない。

「とんでも」『せん一』誘つていただけて光榮ですわ

ヒツヒツと笑つてやう答へる。

「そりか。それなら良かつたよ。それにしても・・・また、雰囲気が違つようだが・・・?」

首をかしげる陛下。

「ええ。実は・・・その事で陛下に謝らなければいけない事が『せん一』

しっかりと陛下の目を見ると陛下は頷いた。

「ふむ。何かな?」

「はい、先日は休暇を頂いていた事もあつて少し気が抜けておりました。いつもより身だしなみに手を抜いておりましたので陛下には大変失礼な姿をお見せいたしました。・・・申し訳ありません。どうか、先日の姿は忘れて頂けませんでしょうか?」

トース陛下は顎に手をあて、少し考えていた。

「・・・つまり、先日の姿は休暇中の姿で人前で見せる姿ではなか

つたと？」

少し低くなった声に、あつてはならない失態だつたと頭を下げる。

「本当に申し訳ありません。陛下にお会いするのにあのよつな姿で会つなど許される事ではございません」

あの姿はみつともなく人前で見せる姿ではなかつたと告げる。

そう言えれば他の人にむやみに話したりはしないだろ。彼は女性に恥をかかせるような人ではないはずだ。

そして、クラウス様の耳に入らない様に……。

「どうか、先日の失態はクラウス様に内密にして頂けないでしょ
うか？立場を考えずとつた行動の罰は私が受けます」

それを聞いたトレース陛下はにっこりと笑つた。

「ふむ……。クラウスには知られたくないのだね。わかつたよ。
先日の事は内密にしておこう。私としては別に失態などと思つてい
ないが、君と秘密を持つ事は楽しそうだ。それに罰などはないよ。
友人として訪ねてくれたのだ。どんな姿でも歓迎するよ」

トレース陛下の暖かい言葉に私はほつと胸をなでおろした。

「……ありがとうございます！」

これで、私の姿を伝えるものはいない。
安心した私は思わず頬が緩んだ。

「……そんなに……かな……」

トレース陛下は何かをぽつりとつぶやいた。
だが、私には何を言ったか聞き取れなかつた。

「え？陛下、何かおつしゃいましたか？」

首をかしげトレース陛下を見るが、にっこりと笑うと、なんでもないよと首を振られてしまつた。

「ああ、ジュリア殿。そろそろ時間だよ。舞踏会へと参りましょう」
そつこいとトレース陛下は左手を差し出し、私はその手に自分の手
を重ねた。

心を閉じ王妃の仮面を張り付けて、トレース陛下と共に舞踏会へと
足をすすめる。

控室を出ると、再び別の個室へと案内される。

「では、私がお2人のお名前を読み上げましたら、こちらより広間へと降りて下さい」

エルステリア国宰相ダグラス・ルーベンスから舞踏会の説明を受ける。

舞踏会では王族が名前を呼ばれた順に、2階の王族席より階段を下り広間の王座へと登場する。

今回は主役がクラウス様と側室の姫君になる為、彼らが一番最後だった。

その前が前国王夫妻。つまり、クラウス様のお父様とお母様だ。そして、その前に降り立つのが私とトレイス陛下となる。

「……ジユリア殿？」

ふと聞こえるトレイス陛下の声に自分が考え込んでいたのだと気づかされる。

「……はい？」

周りを見て見ると先程まで説明をしていたダグラスの姿は見えず、私の前にトレイス陛下が見下ろす様に立っていた。

座っている私と田代が合うとトレイス陛下は仕方ないなと聞いたそうな顔をしてふつと笑った。

「……ダグラス君の説明を聞いていたかな？」

その問い合わせに私は頷く。

「はい。私達は王弟君の後に広間に降りればよいのですよね」

そういつてトレース陛下を見上げると陛下は「くじと頷く。

「・・・・その後は?」

そう問われると首をかしげるしかなかった。

その後はと言わても、後は前国王夫妻とクラウス様達が降りてくるのを待つしかない。

「・・・ダグラス君は君に心を乱さない様にと言つていたのは聞いてなかつた?」

優しくそう聞かれ、私は首を振つた。

「・・・申し訳ありません。聞いておりませんでした・・・」

ダグラスが言つた言葉の意味よりも、自分がぼーっとしていた事に申し訳なく思い頭を下げた。

ダグラスの言つた言葉に深い意味があつたとは知らずに。

「いいや。構わないよ。・・・自分の夫と側室の舞踏会だ。心を痛めるなと言う方が無理だつたね。辛いようだつたら、いつでもいいなさい。早めに引き上げよう

トレース陛下はそう言つと幼子にする様に頭に手を置く。

その行動に目を丸くしながらも陛下の心遣いに心が温かくなつた。

「・・・まあ！トレース陛下！私は子供じゃありませんよ～」

少し睨むようにトレース陛下を見上げると、彼は肩をすくめ「ごめん」と謝った。

そして、再び左手を差し出した。

「さあ、行こうか」

その言葉とほぼ同時に、宰相の声が聞こえた。

「・・・フィーナ国国王トレース・フィーナル様。エルステリア国王妃ジュリア・エルステラ様」

トレース陛下の左手を取つた。

「・・・宜しくお願ひ致します」

一言告げるとトレース陛下は領き、私達は階段上に姿を見せた。広間に見える人々は我が国の貴族を始め近隣諸国より招待された人々で埋め尽くされていた。

人の多さに圧倒されそうになりながらも、横で手を振るトレース陛下に続き私も優雅に手を振つた。

すると、隣りから小声でトレース陛下の声が聞こえた。

「さあ、下に降りるよ」

トレース陛下のワードによつてゆっくりと階段を降りると、先に席についている人たちに挨拶をしながら私たちも自分たちの席に着いた。

それを見計らつた様に、前国王夫妻の名前が呼ばれた。

「・・・大丈夫かい？」

広間の人々が前国王夫妻の登場に目をやる中、トレース陛下は相変わらず私を気遣つて声をかけてくれていた。

「はい、お気遣い頂いてありがとうございます」

につこりと笑つて答えるとトレース陛下もにつこり笑つて頷く。ふと視線を前に向けると、すぐそこに前国王夫妻の姿が見えていた。先に席に着かれていた方々に挨拶をしながら、どんどん近づいてくる前国王夫妻は、数えるくらいしかお会いした事はなかつたが、人柄がよく、いつも良くして下さつていた優しい義父と義母だつた。そんな、彼らがすぐ近くまで来ると私はにつこりと笑つて挨拶をした。

「お義父様、お義母様、ご無沙汰しております」

「つむ、ジュリア。元気そで何よりだ。・・・此度の事申し訳なく思つ」

義父の言葉に胸が痛む。

「・・・いいえ。國の為には必要な事と思つております」

「そつか。しかし、お前たちもまだ若い。焦らずやつなさい」

義父の言葉ににつこりとほほ笑み返事をする、彼らも自分たちの席へ向かつた。

ふうと誰にも気づかれない様に小さな溜息について、前国王夫妻をちらりと見ると義父が義母を気遣いながら椅子に腰をおろしていた。前国王夫妻の間にはクラウス様と弟君のシルヴィ様2人の王子がいた為、側室はいなかつた。

その為か2人の代には争いことも起きず、クラウス様が成人を迎えると、前国王は早々に国王の席をクラウス様に譲り義母と2人で余生を楽しんでいた。嫁いだばかりの頃はそんなお2人の様になりたいと心から思つていた。

「……エルステリア国国王クラウス・エルステラ様！」

宰相が呼んだ愛する夫の名前に私は我に帰つてそちらを見上げた。階段上には、につこりと優しい表情で手を振る夫の姿が見え、ひさしぶりに見るクラウス様の姿に心がときめいた。

しかし、その次の瞬間私は息が止まりそうになるくらい驚いた。

クラウス様の横に並ぶ女性の姿。

その女性は慣れた様に広間にいる人々に手を振つて微笑んでいた。

「……ジュリア殿？」

私の様子に気づいたのか、隣りからトレース陛下が声をかけてくれているが、私はそれに答える事が出来なかつた。

私の目はその女性に釘づけになり、無意識のうちに両手を胸の前で組み力が入るあまり震えていた。

「……ジュリア殿？どうされましたか？」

隣りではしきりに声をかけてくるトレース陛下も全く私の視界には入つていなかつた。

「…………ど、どうして…………」

私の言葉が聞こえたのか、トレース陛下が私の肩に手を置こうとしたその時、宰相の声が広間に響き渡った。

「この度、新しくご側室として迎えられましたイングランシャ国王女リアーシャ・イングヴァル様！」

その瞬間、階段上に居るリアーシャ様と目があつた気がした。だけど、今の私の目には何も映つていなかつた。彼の心を奪つた本人が現れた。私の存在意義はこの瞬間なくなつてしまつたのだ。

「・・・・・ユリア様！ジュリア様！！」

エリーナが呼ぶ声に私はハッとした。

「・・・えつ・・・? なに?」

ふと周りを見渡せば、いつの間にか自室に戻っている。さっきまで舞踏会の会場となつた広間にいたはずなのに、いつの間に自室に戻つて来ていたのだろう? そう思いながらきょろきょろしていると、私の事を心配そうに見つめるエリーナの姿があった。

「・・・大丈夫ですか? ジュリア様」

「・・・私、いつの間に戻つてきたのかしら・・・?」

噛み合わない会話にエリーナの顔が歪んだ様な気がしたが、すぐにエリーナは答えをくれた。

「・・・半刻程前に・・・。トレース国王様がここまで送つて下さいました」

「・・・・そ、トレース陛下に・・・・・」

陛下には申し訳ない事をしてしまつた。

あまりの出来事にまつたく何があつたか覚えていない。

「エリーナ。トレース陛下は何かおつしゃてた?」

粗相があつてはいけないとエリーナに聞いてみるがエリーナは首を横に振った。

「……いいえ。お疲れの様だから早く休ませてやつてくれとあつしゃつて戻られましたが、他には特に何も……」「

エリーナの言葉に手を顎に当てて考え込んだ。
もしかしたら、何か気付かれたかも知れない。

「ジユリア様……。舞踏会の方で何かあつたのですか?」

考え込む私の顔を心配そうにエリーナは覗きこんでいた。

「……リーアーシャ様がいらっしゃつたわ

顔をあげるとエリーナにそう告げた。

「リーアーシャ様ですか?この舞踏会にいじ招待されていらっしゃつたのですか?……伺つておつませんでしたわ

首をかしげるエリーナに私は首を振る。

「……リーアーシャ様が側室としておいでになつたのよ……

「え?」「側室に……?」「え!?

思つてもみない私の言葉にエリーナは目を見開いた。

「え?」「側室に……?」「一体どうこうですか?」「

アーシャ様が！？

軽くパニックに陥っている彼女に私は更に言葉を重ねた。

「…………私は王妃の座を譲らなければね…………」

その言葉にエリーナは動きを止めた。

そうかと思うとまるで鎧びついた扉の様にギギギッと音がしそうな雰囲気でこじらりと向き直る。

「王妃の座を…………？ジュリア様。一体どうしてことなんでしょう？」

訳がわからないと言つた状態でエリーナは私にそう問い合わせた。

「あなたも知つての通り、私はリアーシャ様と間違えられてこじらに来たのよ。本物のリアーシャ様が現れた今、私は必要がないもの…………」

苦笑気味にそう言つと、エリーナの顔がみるみる青ざめていく。

「まさか…………。そんなはずありませんわ！！クラウス様はジュリア様の事を愛しておいでですわー！」の一年側におられたのはジュリア様ではありませんか！！」

エリーナの目には涙が浮かんでいた。

「…………それでも、クラウス様が恋した人はリアーシャ様ですもの。彼が幸せになるのには私ではだめなのよ。ちょうど良かつたじやない。私はもう彼の側にはいる事に限界を感じていたのよ。彼が幸せ

になるのなら喜んで王妃の座を差し出すわ・・・」

彼女が現れた時には確かにショックを受けた。

クラウス様の側に寄り添っていたリアーシャ様があまりにも自然で、私が居たところは始めからなかつたのではないかと思うくらいに。そんな私の言葉にエリーナは口をパクパクさせていたが、何かを思いついたのかハツとした顔をして声をあげた。

「し、しかし！…り、リアーシャ様は『婚約されていたのでは！？』

エリーナの言葉に今度は私がハツとさせられる番だった。
確かにそうだ。

まだ、私がここに嫁ぐ前には他国の王子と恋に落ち2人は結婚するはずだった。

それが今になつてなぜ、この国に側室として来たのだろう。
それはなぜ私の元へ知らせがなかつたのだろう。
エリーナの言葉に、やつと私はその事に思い当つた。

「・・・確かにそうだわ・・・」

彼が幸せになるのならば・・・その場をリアーシャ様に譲れる。
彼といたらリアーシャ様が幸せになれることも、私は側に居た1年で確信できる。

だけど、もしそうでないのなら・・・？

「リアーシャ様はどうしてここに来られたのかしら・・・」

私の言葉にエリーナは頷く。

「本当にそうですわ・・・。リアーシャ様にはウイルト殿下がいら

つしゃつたはずでは

ウイルト殿下……？

「エリーナ……。あなた、リアーシャ様の婚約者を知っているの？」

私の言葉にエリーナは皿を丸くした。

「えー？ ジュリア様、存じなかつたんですかー！？」

エリーナの勢いに思わず後ずさつてしまつ。

「えつ……ええ……」

てつきり皆知らないものだと思つていていたが、どうやらひつではなかつたらしい。

「……公爵のじい令嬢ともあうつお方が、存じないとは。まさか、じこまで、世間知りずだったとは……。はあ……」

額に手を当て首を振る仕草は懐かしい。

結婚前、家に居た時にはよくされていた。

「……だつて、誰も話してくれなかつたんですもの……」

頭を垂れる私の姿に、エリーナは溜息をつきながらリアーシャ様の婚約者の事を詳しく教えてくれた。

「……つまり、元々仲があまり良くなかった國の王子と恋に落ち

て反対されていたのに、リアーシャ様とそのウイルト殿下がその場を収め2人の結婚により友好を深める事となつたのね？」

確認するように私はエリーナに訪ねた。

「はい。その様に伺つておりますわ。ジュリア様が嫁ぐ少し前には婚約をしておられます」

「ええ。婚約をした事は私も、リアーシャ様から直接伺つたわ。でも、まさかそんな出会いだつたなんて・・・」

私がリアーシャ様に聞いていたのは、旦那さまとなられる方がいかに素敵かというのろけばかりだった。

「そこまで想い合つて婚約されたのに、どうしてこのこと・・・」

再び2人の姿が思い浮かんでくると、胸が締め付けられるようだつた。

その夜、一人ベットで考え込んでいた。

今日はきっとリアーシャ様の所へ行くのだろう。
そう思ふと、自然と涙があふれ出てくる。

散々我慢していたんだ。

一人になつて泣ける場所は今この時しかなかつた。

「・・・・・ひ・・・・・ひ・・・・・」

やつと自分から離れる決心をしたと言つたこと、ビビりしてリアーシャ
様が現れるんだろう。

クラウス様は本物のリアーシャ様を見てきっと気付いたに違いない。
あの時恋に落ちたのがリアーシャ様だと言つ事に。
そう考へると、今日見た2人の姿が頭から離れない。

「・・・・・ひ・・・・・ひ・・・・・ひ・・・・・」

あきらめると何度も自分に言い聞かせても涙があふれ出して止まらない。
い。

どのくらいの間、そうして泣いていたんだろう。

「・・・・・ジュリア」

ベットに潜り込んで泣いていた私の横にギシリと音を立ててベット
が沈み、聞きなれた声が聞こえた。
その声に私は驚いて固まつた。

「・・・ジュリア。そのままでいいから聞いてくれるか？」

声を抑える為、頭まで潜り込んでいたシーツをそっとなでる彼の手がシーツを通して私の体に伝わってくる。

私は声を出す事も出来ずそのまま固まっていた。

「・・・君はとても驚いただろうね？君の祖国の人間を側室にしてしまって・・・」

クラウス様は私を撫でながら話し始めた。

「だけど、私も驚いた。君にそっくりな彼女が目の前に現れた時・・・大臣達が私が君に夢中な事を知つてそっくりな彼女を見つけ出したらしい」

クラウス様の言葉にシーツを握り締める手に力が入る。
そっくりなのは当たり前だ。だって、それは私がリアーシャ様の真似をしていたのだから。

「・・・だけど、彼女と君は違つ。そつだろ？ジュリア」

私を撫でていたぬくもりがふと消えて沈みこんでいたベットが軽くなる。

私は慌ててシーツから飛び出すると、目の前には怒りに震えるクラウス様の姿があつた。

「私を騙していたな・・・お前みたいな女は一度と顔も見たくない！
やつをとにかく出ていけ！」

私を睨みつけるクラウス様の姿に私は思わずその場から逃げだしたくなつた。

「・・・・・ジユリア様！！」

エリーナの声に目を開けると、窓からは光が差し込み外では鳥の声が聞こえていた。

「・・・・夢・・・・？」

未だ覚醒しきっていない私にエリーナが水を差しだしてきた。

「大丈夫ですか？ とてもうなされておいででしたが・・・・」

差し出された水を受け取り一口口をつけると、私は思つていたよりも喉が渴いていたらしくコップ一杯の水を全て飲み干した。

「・・・・・とても・・・怖い夢を見たわ・・・・・」

まるで、現実にあつた様に・・・。

再び沈む気持ちにエリーナは明るい声をかけてくれる。

「では、気分転換にお庭に出られてみてはいかがでしょう？ 今日はとてもいい天気ですよ？」

エリーナの言葉にふと窓の外に目をやると、綺麗な青空が広がっていた。

「…………そうね」

窓の外に目をやつたまま私は頷いた。

こんな綺麗な青空が広がっている外を見っていても、気持ちは晴れなかつた。

それでも、頷いた私を見てエリーナは私をベットから下ろし鏡の前に座らせる。

「…………エリーナ…………」

鏡の中の自分に目をやつたまま私は告げる。

「…………今日はリアーシャ様のメイクはしないで…………」

私の言葉にエリーナは驚く事もなく返事をした。

夢の影響だらうか。これ以上クラウス様を騙す事が出来なかつた。あんな風にクラウス様に言われてしまふのなら、いっそ本当の姿を見せて嫌われたかつた。

それとも、もう私には興味も持つてもらえないだらうか…………。知らず知らずのうちに俯いてしまう頭にエリーナから声がかかるまで気づかなかつた。

「ジュリア様。お顔を上げて下さい。お化粧が出来ませんわ！」

ハツと顔を上げるとそこにいた私は、フィーナ國の時と同じ本来の姿をした私だつた。

「……ジユリア様？どんな夢を見られたのかわかりませんが、その夢の通りになるとは限らないのですよ？今は貴方がするべき事をなさってください」

鏡越しにそう話しかけるエリーナの言葉の意味がわからなかつた。

「私は何があつたでジユリア様のおそばにありますから」

そう言つてにっこり笑つたエリーナの笑顔に少し心が軽くなつた気がした。

「……ありがとうございます、エリーナ」

「いいえ。さて、出来ましたわ。次はドレスですねーんー、今日はお天氣もいいですしおレンジのあのドレスに致しましょうー。」

そういふとエリーナはクローゼットへと入つていつた。

「……私がするべき事……」

エリーナの言葉に私は考える。

今私がしなければいけない事つて何？

王妃の座をリアーシャ様に譲る事？

クラウス様に本来の姿を見てもらう事？

ううん……。どれもなんだか違う気がするわ……。

「……リアーシャ様……」

そう、彼女がなぜここに来たのか。

彼女の為にここに来たのにどうして彼女がここにいるのかまでは知らなければ。

もし、何か企んできたのだとしたら・・・。

この国の王妃としてそれは見逃せない。

最後になるかも知れないこの事は私がやらなければいけない事。

「ヒーナ。ドレスはオレンジではなく赤にして頂戴」

するべき事が見えた今、彼女に対抗する為には弱気見えない様少しでも強く見せたかった。

エリーナの持つてきた赤いドレスを身にまとつとなんだか気持ちが引き締まつた様な気がする。

「ジュリア様？どうされるのですか？」

いきなり赤いドレスを持つてここにと言つた私にエリーナは心配そうに私に問いかける。

「エリーナ。私決めたわ。王妃として最後にリアーシャ様がこの国の王妃としてふさわしいか私の目で確かめるわ！」

クラウス様の幸せのためにはリアーシャ様が必要かもしない。だけど、もし何か企んでこの国を落としめようとしているのならば私が守らなければ・・・。

最後にクラウス様の為にして差し上げられる事はそれくらいだわ。

「・・・ジュリア様」

エリーナは私の言葉に顔をしかめたかと思つと何かを考えるじぐさをした。

そうかと思えば一人納得したかのように顔を上げにっこりと笑つた。

「やうと決まれば、参りましょ」

エリーナの言葉に頷けば私たちは部屋を後にした。

向かう先はもちろん庭などではなくあの方の部屋。

緩みそうになる決意を何とか引き締めながら、目的の場所までくれ

ばアポを取つていなかつた事を思い出す。

だけど、ここまで来て引き返す事も出来ない。

突然の訪問に申し訳ない気持ちがあつたが、扉を叩くよつエリーナに促した。

扉をたたけば中から侍女が顔を出した。

「・・・まあ。これはこれは王妃様。・・・王妃様自ら何の御用で
しよう」

さほど驚いた様子はなく、何度か見覚えのある顔ににっこりと笑顔を返す。

「突然押しかけてしまい申し訳ありません。リアーシャ様にお会いしたいのですが、リアーシャ様はいらっしゃいますか？」

そう言葉にすると侍女は眉をピクリと動かし笑顔を作る。

「・・・本当に突然でいらっしゃる事。わが主に確認して参りますので申し訳ありませんが少々お待ち下さい」

そう言つて扉の奥へ消えていった侍女の言葉はいちいち棘があつた。昔はそんな人ではなかつたはずなのだが、やはりリアーシャ様よりも立場が上と言つ事が気に入らないのだろうか？

「・・・ほんとにあのばばあ・・・」

静寂の中ぽつりと聞こえた言葉にそちらを振り向ければす”に形相のエリーナが立つていた。

「エリーナ・・・言葉を控えなさい」

苦笑しながらエリーナを窘めれば、目を見開き頭を下げる。

「も、申し訳ございません。聞こえていますか・・・？」

そろりと頭を上げるエリーナに頷けば、再び頭を下げた。

「すみません。つい思つてゐる事が口に出てしましました」

「まあ」

反省しているのかいなか、そんなエリーナに苦笑していたら、再び扉が開いた。

「・・・どうぞ、お入りください」

向き直つて侍女と対面すれば侍女はそう言つて扉を全開に開いた。

「・・・ありがとうございます」

侍女は何も言わず頭を下げた。

その姿にエリーナの顔が歪むもののそれを抑えさせ、中へと足を踏み入れた。

応接室となつてゐるその部屋は私の使つてゐる部屋より少し狭い。狭いと言えども天井は高く、人が十数人入つても苦しいと思つ事無い広さだ。

「・・・お久しぶりでござります。王妃様」

ふと、視線を前に戻せば椅子の横に立ちあがつてドレスを摘み頭を

下げるリアーシャ様の姿があった。

「頭をお上げ下せ。」こちらこそ、『無沙汰いたしております。突然の訪問に応対して頂きありがとうございました』

そういうと、私は裾を摘み腰を落とすに留めた。

一応でもなんでも、この国の王妃は現在私である。

そう簡単に頭を下げるわけにはいかなかつた。

だが、リアーシャ様の侍女はそんな私の姿に眉をよせていたのが視界に入った。

「いいえ、王妃様の訪問嬉しく思います。本来ならば、こちらからご挨拶へと伺わなければいけないのに足を運んで頂き申し訳ありません」

にっこりと笑つてそう言つリアーシャ様の姿は立場は違えど、イングランシヤ国にいた頃によく見た笑顔だつた。

「・・・いいえ」

その笑顔に私が思つてゐる事は間違つてゐるのではないかと心が揺らぐ。

「立つて話もなんですから、ビリビリ、お座りになつて下せ」

そう言つてリアーシャ様の前の席を勧められれば、礼を言つて席に着く。

「お元気そうでなによりますわ」

お互に席に着けば、変わらない笑顔のままリアーシャ様がそつ話しかけてくる。

「リアーシャ様こそ、お元気そつで……」

ここまでやつてきたものの、昔と変わらないリアーシャ様に困惑い言葉がそれ以上出でこない。

そんな私に気付いたのかリアーシャ様は苦笑いと叫つた感じで話を続けた。

「……なぜ、私がここに来たのかを聞きたて来たのでしょうか?..」

昔の様に話しかけられれば、その内容に驚き田が丸くなる。

「ふふ。相変わらずすぐ顔に出るのね。ジュリアは」

天使の様な笑顔でそう言わるとかあと顔が赤くなるのが自分でもわかつた。

両手を頬に添えれば、向かいの席ではリアーシャ様の表情が暗くなつている事に気付いた。

「……『めんなさい。ジュリア』

今にも泣き出しそうな声色に私は思わずリアーシャ様の手を取つた。

「いいえ!何か理由があるんですね?…うう…リアーシャ様」

そういう私の言葉にリアーシャ様はふるふると首を横に振る。

「いいえ。たとえ理由があつても許される事ではないもの。こんなこと・・・大切な友人の幸せを壊す様な事！！」

ぼろぼろと流れだすリアーシャ様の涙に思わず私はそつとハンカチを差し出す。

「・・・リアーシャ様・・・」

ちょっと短めです。

差し出したハンカチを受け取ろうとはしてくれず、私はリアーシャ様の頬にそつとハンカチで触れる。

そのハンカチでリアーシャ様の涙を拭うとリアーシャ様は私の手を取りつた。

「・・・ありがとう、ジュリア」

瞳が濡れたままにっこりと笑われるその姿は本物の天使の様だ。こんな笑顔をもつリアーシャ様がまさかクラウス様に何かを企てるなどと考えた自分が恥ずかしくなつた。

「・・・いいえっ！私の方こそ謝らなければ・・・」

そう言いかけて言葉を詰まらせた。

そんな私にリアーシャ様は言葉を続けた。

「・・・ジュリアには辛い事をしてしまつているかもしれない。・・・だけど・・・私もここに来てしまつた以上は努めを果たさなければいけないわ」

リアーシャ様の言葉にハッと顔を上げると、濡れている瞳が真剣な様子でこちらに向いていた。

「貴方には本当に辛い思いをさせると思うわ。・・・だから、私の事を憎んでも構わない。だけど、覚えておいて？私は決して彼を好きなわけではない事を」

そう言つてリアーシャ様の瞳はゆるぎない何かを宿していた。
彼女の言つた言葉の意味を考える余裕もなくその瞳で見つめられた
私は思わず顔をそらしてしまった。

「・・・わかりました・・・」

そして、そのひと言を言つだけで精いっぱいだつた。

「・・・ジユリア？顔を上げて」

リアーシャ様の言葉に私は失礼だと思っていながら首を横に振る。
こんな顔は見せられない。

「・・・ジユリア」

再び呼ばれる私の名に私はしづしづ顔をあげた。

「・・・ごめんね」

そう言つて先程私がリアーシャ様の涙をぬぐつたハンカチで今度は
私がリアーシャ様に涙を拭われた。

困つた様に笑うリアーシャ様の笑顔が今の私には辛かつた。

リアーシャ様の部屋を後にして戻ってきた自室で私は頃垂れる。

「ジュリア様？大丈夫ですか？」

リアーシャ様の話を傍で聞いていたエリーナは心配そうに覗き込んできた。

「…………ええ…………」

そう答えるものの心は少しも大丈夫ではなかった。

クラウス様の隣りをリアーシャ様に譲る覚悟はできていると思ったのに。

いざそれを本人の口から聞くとどうしても心が無数の針で刺されるようにチクチク痛む。

「…………ジュリア様。もう、正直にクラウス様にお話しされてはいかがですか？」

私の様子を見かねたのか、エリーナは覚悟を決めた様にそう話し始めた。

「クラウス様は決して外見で人を好きになるような方ではございませんわ！1年も傍にいたのはジュリア様です！お心はきっとジュリア様にありますわ！」

その言葉に私は力なく首を振った。

「……そんな事わかつてゐるわ。……だからこそ私はダメなのよ」

エリーナに聞こえるか聞こえないかの小さな声で私は言葉を紡いだ。

「なぜですか！？」

エリーナはしつかり聞きとつていた様だ。

なぜと言われても答えられない。側にいてそれを感じたのだから。いつも笑顔を絶やさず優しくしてくれるクラウス様。だけど、いつも心のどこかで何かを思つてゐるようだった。決して私では埋められない何か・・・・・。

エリーナは私が返事をしない事で言いすぎたとでも思つたのだろうか。

慌てて頭を下げた。

「も、申し訳ありません…出すぎた事を申しました…！」

「……いいえ。心配してくれていいのるもの。気にしないで」

にっこりとほほ笑んだはずなのに、エリーナの表情は何だが苦しそうだった。

そんなエリーナに私も苦笑すれば、少し一人になりたいと告げた。心配そうに私を見詰めながらもそれを了承してくれて、エリーナは部屋を後にした。

「・・・・・どうしよう…・・・・・」

これから、私はどうすればいいのだろう。

側室を召しあげたばかりでこの国を去つても大丈夫だろうか。

何か勘ぐられはしないだろうか。

だからといって、私はお2人の姿を見ていふ」と出来るのか。

「・・・無理に決まつてゐる」

リアーシャ様の言葉を聞いただけでこんなに胸が痛いのだ。

2人が仲睦まじく寄り添つてゐる姿などやはり見れるわけがない。

「・・・誰か・・・」

私をここから連れ出して・・・。

ベットにつづぶせになると誰にも聞こえる事無くその言葉はかき消されていった。

そして、誰にも知られる事無く涙を流した私はいつの間にか眠りについていた。

「・・・リア様・・・。ジュリア様！」

エリーナの声で目を覚ますといつの間にか外が暗くなっているようだった。

「・・・もう夜・・・？」

ふと体を起こしながらつぶやくとそのまま体を支えてくれながらエリーナが返事をくれた。

「はい。そろそろお夕食のお時間ですよ」

にっこりと笑い答えてくれたエリーナが私の顔を見ると一瞬驚きに変わり今度は苦笑に変わった。

「・・・ジュリア様。すぐに布をお持ち致しますわ」

そう言ってエリーナは一旦部屋を出た。

なぜ?と、頭を捻るうちにエリーナは再び部屋へと戻つて私にそれを渡した。

「・・・冷たい」

「はい。それで田元を冷やされると宜しいですわ」

やはり苦笑気味に笑つエリーナに言われて、瞼が腫れている事に気が付いた。

「…………ありがとう」

エリーナの気遣いに礼を言つとエリーナは首を横に振つた。
エリーナは何も言わないが、この顔を見た時点で私が泣いていた事
はバレバレだらう。
だけど、何も言わないでいてくれる事が今はありがつたかった。

「ジユリア様。お食事はお部屋の方へ運ぶよつに手配致しましたの
で、ゆつくつされて下さつね」

いつの間に手配したのか、私の状態をすぐに読み取りそう言つた気
遣いをしてくれるエリーナに思わず抱きついた。

「エリーナ。いつもありがとうございます。本当に、貴方がいてくれる
と心強いわ」

エリーナの腰をギュッと抱く私はまるで子供の様だ。
だけど、いつも傍にいてくれるエリーナに思わず甘えたくなるくら
い私の心は弱つていた。

「…………いいえ。私はいつでもジユリア様の為に……」

そういうとそつと背中をポンポンと叩いて私を落ち着かせてくれる。
たつた一つ年が上だと言つのこと、エリーナはまるで母親の様だった。

「…………私ね……。やつぱりこの国を出るわ……」

私はそうポツリと言つとエリーナの手が止まつた。

そして、そつと私はエリーナの腰から離され、エリーナは膝をつい

て私と同じ田線になつた。

「・・・・かしこまりました。ジュリア様のお心のままに」

そう言つてにっこりと笑つてくれたエリーナに私は再びギュッと抱きついた。

そう、私はさんざん泣いた後決めた。

この国を去る事を。

リアーシャ様はきっとクラウス様を幸せにして下さる。

クラウス様も想い続けたお相手とやつと幸せになれる。

それならば、私はこの国を去つた方がいい。

お世継ぎが生まれればすぐに私が去つた事も風化されてしまうだろう。

そう考へ、私は決心した。

城を出るのは1ヶ月後。

それまでに、私は国に戻るか、他国へ亡命するか決めなければいけない。

その間に私は王妃としての仕事を終わらせ、リアーシャ様に引き継ぐ事に決めた。

すべてを投げ出していくは民に迷惑がかかるであろう事から。

城へ戻つてきて、リアーシャ様の元へ訪ねて以降はずつと部屋に籠

りっぱなしだつた。

その理由はもちろん城を出る為の準備に追われていたから。祖国に迷惑がかからない様、クラウス様に迷惑がかからない様あちこちに手を回す必要があった。

そんな中、久しぶりにこの部屋へ訪ねてきた人がいた。

「・・・無事で何よりです。貴方がたの活躍は私も伺いました。良くやつてくれました。アルバート」

フィーナ国で舞踏会のパートナーとして参加できないと告げられてい降、国の為に働いていたアルバートが城へ戻ってきた報告と挨拶にやって来ていた。

「その節は王妃様に多大なる」迷惑をおかけいたしまして申し訳ありませんでした」

頭を下げるアルバートに顔を上げるように促す。

「気にならないで。あなたはこの國の為に働いたのです。謝る事など一つもありません。それよりも、ゆっくり体を休めて頂戴」

にっこり笑うとアルバートは再び頭を下げた。

「はっ！ありがたきお言葉・・・王妃様・・・」

お礼を言つて下がるはずのアルバートが私を呼びとめた。その事に少し嫌な予感はしたのだ。

「・・・何かしら？アルバート」

「はい。国王より面会を申し遣つております。本田の午後いつもの時間に執務室へ来るようのこと」

そう言つとマルバートは三度頭を下げ、今度こそその場を後にした。
私の返事を聞く事無く……。

「…………つまり、これは命令つてことね……」

零れる溜息。

私はいよいよクラウス様に会わなければいけない事実に肩を落とすしかなかつた。

城を離れる準備はもちろん、体調が優れないからと言つてクラウス様を避けていたのも事実だつた。

「…………いつかは呼び出しが来るとは思つていたけれど、いざ本当にそうなるとなかなか覚悟が決まらないものね」

誰にも聞かれる事無く一人苦笑と共にしぶやく言葉に思わず本音が紛れ込んだ。

しかし、どちらにしても会わなければこの先話は進められない。

「エリーナ！」

そう言つてエリーナを呼ぶと私はいつもの様に鏡の前に座つた。

「…………ジュリア様？どちらかにお出かけでござりますか？」

傍にやつてきたエリーナは不思議そうに鏡越しに私を見つめた。

「ええ。クラウス様から呼び出しがあつたわ。あのメイクをお願い

それを聞くとエリーナは少し顔を引きつらせたが、すぐにメイクの準備を始めた。

「クラウス様。『挨拶が遅れて申し訳ありません』

クラウス様の部屋に入つてすぐに私は頭を下げ、これまで会わなかつた事を謝つた。

「…………ジユリア…………」

仕事をしていたであるつクラウス様が固まつたのが見ていくつてもわかつた。

「…………本当によろしくのですか？」

エリーナは私が部屋を出る前にそう聞いた。
それもそつだろつ。

今私はリアーシャ様の姿をしていたわけではないのだから。

「いいのよ。話せばわかつてくれると言つていたのは貴方でしきう？」

「ひひりと笑いそつこうが、エリーナは心配でしきうがない様だつ

た。

「・・・私も、嘘をつく事に疲れたの。最後になるのなら、きちんと本当の事を知っていて欲しいのよ」

そう言ってなんとかエリーナを宥めクラウス様の元へやってきたのだ。

「クラウス様。大事なお話があります。少し私の為にお時間頂けますか?」

そう言って顔を上げるとクラウス様はハッとしたように私にソファへ座るように促した。

いつもの指定席・・・ここに座るのもこれが最後になるだろう。そこに腰かけると、クラウス様の侍女が用意したお茶が皿の前に置かれた。

それを手にして、一口口に含んで自分を落ち着かせる。

「・・・ジュリア」

目の前に座るクラウス様が私の名を呼ぶ。

私は、手にしていたカップを元の位置に戻すとスッと背筋を伸ばしそっかりとクラウス様の目を見て口を開いた。

「・・・驚かれましたか？でも、これが本当の私なのです。今まで騙していく申し訳ありませんでした。これから、全てをお話致しますわ」

そう言つて、にっこりとほほ笑むとクラウス様は口を閉じ、無言で私に先を促した。

私は、これまでの経緯を全て話した。

途中何度も言葉に詰まりながら・・・。

「・・・私はあるべき姿に戻る事に決めました。これ以上嘘をつく事が辛くなつたのです。傍でお2人の姿を見ることにも耐えられません。今まで、本当に申し訳ありませんでした。私がこんな事をしなければお2人はもつと早くに会えていたはずなのに・・・。クラウス様・・・本当に愛していらっしゃる方とお幸せになつて下さい・・・」

そう言つて席を立とつとした。

が、それはクラウス様によつて阻まれた。

「全て知つている」

そのひと言で。

「・・・え？」

思わずクラウス様を見た。

すると、クラウス様の鋭い視線が私に突き刺さる。

今まで見ていた優しい瞳ではなく、怒りでいっぱいになつた瞳。クラウス様を纏う空気がまるで震えているようだ。

そんな彼に思わず私は竦みあがつた。

「・・・ジユリア」

今まで聞いたこともないくらい地を這う様な低い声。クラウス様が席たつてこちらに近づいてくるが私は動けないでいた。

「ジユリア」

隣りに座りそつと私の頬を撫でる。

「は、はい・・・・・」

声が裏返っていたが今はそれどころではない。なぜだか、クラウス様の視線をそらせずにいた。

「お前は、私を甘く見すぎている」

顔を近づけられ、耳元でそう囁かれるとなぜだか背筋がそつとする。

「ここの1年お前は私の事をまったく信用していなかつたのだな」

ふと離れたクラウス様の存在にほつと胸をなでおろすのも束の間、今度は手を取られてそつと口づけられる。

吃驚してその手を引きもどそうとするがそれを強く握られ阻まれる。

「・・・放さないと言つたはずだ」

その言葉にクラウス様を見るとその瞳に怒りはなかつた。

「・・・クラウス様・・・・・?」

そつとクラウス様の名を呼ぶと彼は私の手を離し盛大に溜息をついた。

「つはあああああ～…………。お前はどこまで私の事を信
用していいのだ?」

クラウス様の言つている意味がわからず思わず首をかしげる。
その姿を見たクラウス様が再び溜息をついた。

「……一度会えばそれがリアーシャではない事くらいすぐに気付
いた」

その言葉に私は田が飛び出てしまうのではないだろうかと思つほど
吃驚した。

「当たり前だらつ。人を見る田は嫌と言つほど養われているのだ。
見てわからない訳がないだらつ……」

呆れたようにそういうクラウス様に私は思わず言葉が零れた。

「で、でもーあの時はそんな事一言も……」

我が家へ訪れた時には何も言わなかつた。

「……あれは……お前に一田ぼれしたのだ

今までの勢いはまどりへやら?最後の言葉に自分の耳を疑つた。

「…………は?」

私の反応にクラウス様は顔を真っ赤にさせながら叫んだ。

「…………っ！ 彼女を守ろうとしているジュリアに一目ぼれしたの
だ！！！」

その言葉を理解するまでにしばらくかかった私は理解したと同時に
思わず叫んでしまった。

「…………えええっ！？」

その叫び声を聞いてエリーナが国王の執務室であるのにもかかわら
ず飛び込んできた。

「ジュリア様！！！」

勢いよく扉を開けば、エリーナの目に映ったのは真っ赤になつた2
人が仲睦まじく手を握り合い慌てていた。

「…………ジュリア様？…………クラウス様？」

訳のわからないエリーナに、クラウスはいち早く自分を取り戻しエ
リーナになんでもないと叫びと再び外で待つようにとその場から追
い出した。

「…………はあ。ジュリア。私はこれまで嫌と言つぽぢ色々な奴を
見てきた。私に媚びへつらう奴も、私を殺そうと企んでいる奴も…
…。そんな私が気付かないわけがないだろ？」

「で、でしたら、なぜ……なぜ、それをおっしゃってはくださらな

かつたのですか？」

クラウス様の言葉に私は思わずクラウス様に掴みかかる勢いで問い合わせる。

「それは…………お前を手放したくなかったからだ」

ぼそりとつぶやくクラウス様に私はもう何も言えなかつた。

「必死にその事を隠そうとしているお前をみてしまつと何も言えなくなつた。それに…………それを気づいていたと知つたらお前が国に帰ると言いだすかと思っていた。…………情けないな。国の事ならば即座に結論をだせるのに、お前の事となるとどうしても戸惑つてしまつ。もし、国に帰りたいと言われたら？知つていた事を知られて嫌われてしまつたら？そう思つとどうしても言えなかつた…………事実、お前が離縁したいと言い出した時は、思わず鎖で繋いで私の部屋から出れないでおこつたと思つたくらいだ…………」

最後は聞き捨てならない事を言われた様な気がしたのだが、そう言って頭を垂れるクラウス様を見ていると思わず手を伸ばしてしまつた。

しかし、その手を取られると獲物をとらえた様な眼で私を見ていた。

「ク、クラウス様！――」

思わず手を引っ込めよつとしたが強く握られそれも叶わなかつた。

「…………ジユリア。信じてくれ。私は君が好きだ。ジユリア・エルステラを愛している」

まっすぐに見つめてくる瞳は、クラウス様の想いを物語ついていた。

「…………クラウス様…………わ、私も……愛しております」

こみ上げる想いと共に頬を伝つて流れる涙を、クラウス様はそつと拭つて私を抱きしめた。

「愛していろ。ジュリア。これからも私と共にあつてくれ……」

クラウス様のぬくもりが消えたかと思うと、唇にそのぬくもりを感じた。

全てが解決した今、その温もりはいつも以上に優しく心に染み渡つていった。

ふと、目を覚ますと見慣れた部屋。

思わず勢いよく起き上がりつて周りを見渡した。

「…………夢…………？」

ポツリとつぶやいた自分の言葉に思わず肩を落としてしまった。

「そ、そうよね…………。そんな事…………」

あるわけがない…………と続けようと思つたが、それを遮られた。

「起きたか？」

聞こえた声に思わず顔を上げると、扉から部屋へ入つてくるクラウス様の姿がそこにあつた。

「ク、クラウス様…………」

「なんだ?まさか昨日の事が夢だとでも思つていたか?」

はははと笑うクラウス様の笑顔はいつもの様に優しい。そして私のいるベッドまで来ると傍に腰かけた。

「…………ジユリア…………おはよっ」

頬を撫でるクラウス様の瞳には私への愛情が感じられた。

「・・・・クラウス様・・・・」

再び私の目に涙が溜まっている。

昨日の事が夢じやなかつた。

その事に涙は止まらなかつた。

「・・・昨日から泣いてばかりだな

そういうと、困つた様な笑顔で私の涙をぬぐつた。

「ジュリア。君が用意させた荷物はすべて元へ戻す様に指示した。
もつこを出て行こうなんて思つてないだろ?」

クラウス様の言葉に私は静かに頷いた。

クラウス様の気持ちを知つた今、傍にいたいと思つ気持ちは止めなくともいい。

そう思つと、止まりかけていた涙も再び溢れだす。

「泣き虫なのだな、ジュリアは。・・・これから、お互い色々な事を話しあつていこう。本当のお前をもつと知りたい」

クラウス様はそつと私の額に口づけを落とし、スッと立ちあがつた。

「今日はゆっくり休むといい。夜、また来る

そう言い残すと先程の扉から出て行つた。

流れ出す涙は未だ止まらなかつたが、心はとても満たされていた。

「・・・ジュリア様」

扉の向こうからエリーナの声が聞こえる。
涙をぬぐい、一つ咳払いをすると私は答えた。

「……入室を許可します」

その言葉を言い終わるとさつと扉が開いてエリーナが顔をのぞかせた。

「おはようございます」

扉の前で頭を下げるエリーナ。

「エリーナ……」

言葉を紡ぎうとすれば再び涙がこみ上げてくる。

「……何も言わなくて結構ですよ。良かつたですねー。ジュリア様……！」

頭を上げたエリーナの顔は満面の笑みだった。

「あ……ありがとうございます」

溢れだす涙に、思わず顔を両手で覆ってしまった。
すると、そつとその手に伝わる温もりを感じた。

「……ジュリア様。泣いてばかりではダメですよ。せつかの幸
せが逃げてしましますからね」

そう言つエリーナの声が少し震えていた事に気づき、私はそつと顔

を上げる。

すると、エリーナの田にもきらりと光るものを見た。
それでも、にっこりと笑っているエリーナを見て、私も笑顔を返した。

* * * * *

朝はあまりの出来ごとに信じられない思いだった。
だけどやつと気持ちも落ち着きゆつくりお茶を飲んでいた時だった。

「これからは本当の『夫婦』としてクラウス様と暮らしていきますね！」

エリーナが嬉々として話している。

「本当の夫婦」

「ええ…そうですわ…心が通じ合ったのですもの…何も心配いりま
せんわ…」

自分の事の様に喜んでくれるエリーナに私も思わず笑顔になる。

「ありがとう・・・。貴方にはいつも迷惑ばかりかけてしまっていいものね」

「いいえ！迷惑だなんてとんでもないですわ！本当のジュリア様を

愛しておられたとは国王様も見る目がありますね

その言葉に思わず頬が熱くなる。

「ふふふ、ジユリア様。お顔が真っ赤ですね」

「も、もうーからかわないで頂戴！エリーナつたら……」

そんな事を言つていた時だ。

扉からノックの音が聞こえた。

「まあ！もしかしたらクラウス様が待ちきれなくて戻つてこられたのかも知れませんわ！」

そんな事を言いながらエリーナはスキップでもしそうな勢いで扉へと向かった。

「・・・もう。エリーナつたら・・・」

私はさつきからあの調子のエリーナにやられっぱなしだ。
頬が赤く染まるのも今田は何度めだろう。

ぱたぱたと手で熱くなつた顔を仰いでいると、エリーナが戻つてきた。

「・・・ジユリア様」

先程までのエリーナの声色とはあきらかに違つていて。

その声色にエリーナの方に視線をやると少し青ざめた様なエリーナが立つていた。

「…………どうしたの？」

「…………り、リアーシャ様が…………」

リアーシャ様……。

その名を聞いたときにハツとした。
あまりに浮かれていたのだろう。彼女の存在をすっかりと忘れていた。

「…………リアーシャ様がどうされたの？」

青ざめた顔色のエリーナを見て、なんだか嫌な予感がした。

「…………」血書なされたそうです……。

エリーナの言葉に私は頭が真っ白になつた。

「…………え…………？」

「…………幸い、発見が早く命に別条はないと言つ事ですが、お怪我をされているとの事で…………」

エリーナの手が震えていた。

「…………リアーシャ様が…………血書…………」

頭の中に響くその言葉に私はその場から動けなくなつてしまつた。

心臓の音がこんなにも聞こえる事なんてあつただろうか？
自分の足音がどこか遠くの方でなつているかのように聞こえる。

「ジユリア様！落ち着いて下さいーー！」

後ろから追つてくるエリーナに手を掴まれてハツと我に帰る。

「はあっ、はあ・・・・・。ジユ、ジユリア様・・・・・。リアー
シャ様は今は眠つておられます。今伺われるのはいかがなものかと
つ・・・・・」

先程、エリーナの言葉を聞いてから、無意識のうちにリアーシャ様の部屋へと足を進めていた。

「あつ・・・・・。そ、そりね・・・・・。」

手首をつかんでいた手が離れる。

エリナは息を整えると和の方を向いて言った

「ジユリア様。とにかく一度お部屋にお戻りください」

そう言つとヒリーナはそつと私の肩を支えてくれた。

「・・・私のせいだわ・・・・・」

そのひと言ですべてを察したのか、エリーナは目を開き首を横に振った。

「いいえ。ジュリア様の所為ではござりません。思い出してください。リーアーシャ様は国王様を好きなわけではなくことおっしゃつていただではありませんか」

「……いいえ……。それは、きっと私の為に思つて言つて下さつた事だわ……」

私はあの時に言われた言葉を思い出していた。

心の綺麗な方。

の方ならばきっと私の為にやついたに違いない。

「……やつでしょつか……」

エリーナはなおも私の言葉を否定する。

「やつよ……やつでなければ、なぜ……なぜ、王族のリーアーシャ様が側室などになると嘔ひの……そんな事あつていいはずがないのに……」

リーアーシャ様の事を一瞬でも忘れてしまつた自分の情けなさにぐんぐん慕る感情があふれ出して止まらない。

「……ジュリア様……」

「……申し訳ございません。出すぎた事を申しました。……とにかく、今はお部屋に戻りましょ」

エリーナは頭を下げると、私を支えたまま部屋へと急いだ。

私は、心中に渦巻く自分の感情をどうすればいいのかわからなか

つた。

尊敬していたリアーシャ様が自害をされたと言つ事實にビビつしても自分の所為だとしか思えなかつた。

だからといって、もうクラウス様を譲ることなど考えられない。それなのに、リアーシャ様に幸せになつてもういたいなんて甘い事を考えている。

自分がリアーシャ様から奪つたのに・・・・・。気づけば、頬に冷たいものが伝つていた。

私に泣く権利なんてないのに。

そう思つと、泣いている事をえ情けなくなる。

「ジユリア様！そんなにお顔をこすられたら・・・・・」

涙を流す資格のない私は想いきり袖で涙をぬぐつた。

それを横から止めようとするエリーナの手を振り払つて。

「いいの……ほつておいて頂戴！これくらい何！？リアーシャ様はもつと酷い傷を負つていらっしゃるのよ！それなのに、私はつ・・・・・！」

情けない情けないつ！

「・・・・・やっぱり、私がここにいてはいけないの？・・・・・」

ふと、力が抜けると無意識のつむぎつづりと言葉がこぼれ落ちる。

「そんな事あるわけないではありますか？――」

思い切り否定するエリーナの言葉に思わず眉を寄せ私は反論しようとしました。

だけど、その瞬間聞こえないはずの声が聞こえた。

「侍女の言つとおつだ」

ふと、振り返るとそこには今朝見た姿のままのクラウス様がアルバートとともに立っていた。

「ジユリア。約束しただろう？私と共ににある事を。その約束をもう破るつもりかい？」

クラウス様の言葉に止めた涙が再び溢れだしそうになる。

「・・・・クラウス様・・・・」

エリーナはクラウスの登場に目を丸くしながらも、私の傍を離れ頭を下げていた。

そんなエリーナの横を通り過ぎクラウス様は私のすぐ傍までやってきた。

「ジユリア。リーアーシャの事は心配するな。命に別条はない。少し手首を切つているが傷は深くないし、直に良くなる。・・・・ただ、君はすこし彼女に会いに行く事を控えなさい。彼女の心を想えば時間置く事が大切だよ」

ポンと頭の上に置かれた手のぬくもりに喜びを感じながらも、クラウス様の言葉に愕然とする。

「・・・・リーアーシャ様が私に会いたくないとおつしゃつたのですか・

・・・・」

当然かもしれないがその事に酷く心が痛む。

「そうじゃない。彼女は何も言わない。ただ、今はそつとしておいてやるうと思う。彼女の事は私達にまかせて、君も少し休んだ方がいい。・・・いいかい?」この事は君のせいではない。自分を責めたらいけないよ?」

そういうと額にキスを落としてクラウス様は来た道を戻つていく。クラウス様の姿が遠のくのを確認して、クラウス様の後に続こうとしていたアルバートを引きとめた。

「アルバート。待つて」

「うしても聞いておきたい事があった。」

「・・・本当の事を教えて頂戴。やはり、リアーシャ様は私に会いたくないと・・・」

最後まで言つ前にアルバートが言葉を重ねる。

「いいえ! それはクラウス様のおっしゃつたとおりです! ・・・ 彼女は今、何も話されないので。どうしてこんな事をしたのかも・・・」

アルバートはそこまで言つと、再び頭を下げてクラウス様の去つた方へ走り去つた。

「・・・ジュリア様・・・」

私たちのやり取りを見ていたエリーナはそつと私の傍によつて再び

肩を支えてくれた。

「…………エリーナ…………私…………」

「ジユリア様。大丈夫ですよ。…………国王様もおっしゃっていた
ではありませんか。とにかく、今はお部屋に戻つてゆっくりお休み
ください」

そう言われ、私はエリーナに肩を抱かれながら部屋へと戻った。

少し短いです。

部屋に入つて早々に今度はノックの音が聞こえてきた。

「まあ？誰でしょう？」こんな時に……」

エリーナは私を心配そうに見ながらもノックが聞こえた扉の方へと歩いていった。

心配されるくらい私の顔はひどい事になつていいんだね。だけど……。

「…………困ります……」

ふと、エリーナが扉の側で怒鳴つているのが聞こえた。かと思うと扉から入つてくる人影が見えた。

「ジユリア殿……」

その声に、その姿に驚いた。
そこに居たのは……

「トレース陛下……」ぐら陛下といえどもここは王妃の血室で「」ぞいます！クラウス国王様以外での入室は許されておりません……」

慌ててエリーナがトレース陛下の後を怒鳴りながら追つてきた。

「ト、トレース陛下……？」

トレース陛下はエリーナの言葉を無視して、私の前で膝まづいた。

「ジユリア殿。この度は大変なことになりましたね。あなたの事が心配で居てもたっても居られずついついおまえまで来てしました」

「そう言って私の手をとるトレイス陛下。

私は、ここにトレイス陛下が居ることに驚きすぎて何もできなかつた。

「ト、トレイス陛下！！いい加減になさつてください……もう少しだけ明かないわ！誰か！クラウス国王様をお呼びして……」

「ジユリア殿……。こんなに顔を赤くして……」

そう言って伸びて来た手にハツとして、私は後ずさつた。
それに気付いたトレイス陛下は伸ばしていた手を下ろした。

「……そんな風に避けられてしまつたら、傷つきます。……
ああ、あなたがクラウスのものでなければ、この手であなたを抱き
しめられたのに」

そう言って、悲しそうな顔をするトレイス陛下は下げた手をぎゅう
と握つた。

「ト、トレイス陛下。な、なぜここへ？エリーナが申し上げた通り
ここはクラウス様以外の男性の方の入室は固く禁じられておりま
す。どうぞ、お引き取り下さるませ」

私のすぐそばには、猫が逆毛を立てるかのようにエリーナがトレー
ス陛下を睨んでいた。
エリーナの言つとおり私が「も、はつせり」と陛下に手を取つてもう
う血を伝えた。

それなりに、陛下はなんのことなによつに笑つた。

「ふつ・・・・。あなたは、騙されているのですよ？クラウス！」

「騙されている・・・？意味がわかりませんわ。クラウス様が何を騙しているというのです！？」

先程までのトレイス陛下とは打つて変わつて、挑戦的な笑みでクラウス様の事を言われ思わずカツとなつて言い返してしまつた。

「・・・・・それは、私の口から言つたのではないでしょ？・・・・・あなたが、この国を出ていきたいと思つた時、私はいつでもあなたをお迎えしますよ」

そつこつとトレイス陛下はこつこつと笑つて私を見下ろした。トレイス陛下の言つている意味がわからない。

「いい加減になさつてください！トレイス陛下。いくら陛下といえども、ここは他国の王妃の私室です。ここに居らつしやることは許される事ではありません。今すぐこの部屋から出て行つて下さい！」

横からエリーナがもう我慢できないとばかりに口をはさんできた。だが、トレイス陛下はエリーナの言葉など聞こえていない様に、私の顔を探るように見ていた。

そうして、ふうつとため息をついたかと思つと今までの雰囲気が和らいだかのよつとトレイス陛下が口を開いた。

「・・・・・申し訳ない。つい、君の親友が怪我をしたと聞いて君が心配で駆けつけてしまつた。私とした事が感情に流されてしまつた様だ。クラウスにもきちんと謝罪しておくよ。申し訳なかつたね」

本当に申し訳なさそうに頭を下げるヒ、トレース陛下は部屋を後にした。

「…………はあ～…………？」

緊張していたからだから力が抜け自然とため息が零れた。

「一体、なんだつたの…………？」

トレース陛下のおっしゃっていた事つてビリコいつ事なんだろ？。

「全くですわーまさか、あのお方がこんな非常識な事をされるなんて！！」

エリーナは私のつぶやきにふりふりと怒りながら返事を返してきた。もちろん、私の言った意味とは違う意味で私の言葉を受け取っていたようだけれど。

「とにかくーあの方は一度ここに来られない様しつかりと国王様にお願いしなければいけませんわー！そういうえば、国王様を呼びに行かせたはずなのに、他の者は何をやつてこるのでしょうね？もうつ！私ちょっと見て参りますーーー！」

エリーナは相当怒っているのだろう。

私の返事もきかずにはんすんと部屋を後にした。

「…………騙す…………つて」

ぱつりとつぶやいた言葉に自分の今までの事を思い出した。

リアーシャ様の真似をして彼を騙していた事。

だけど、トレース陛下の言う様に彼も私を騙している事が・・・？
そんな考えを振り払うように首を振つてみても、トレース陛下の言つていた言葉がなぜか心に深く引っ掛かっていた。

「・・・一体、何を騙すと言つのかしら・・・私を騙したところ
でクラウス様が得るものなんてないはずよ・・・」

自分に言い聞かせるように言葉を紡ぎだしても、心に引っかかった
それはどうしても消えてくれなかつた。

「見頂いてありがとうございます！」

最近は忙しくなかなかアップ出来ないついで、行き詰っています（
T_T）

のろのろと龟更新になると思いますが、長い目で見て頂けるとありがたいです。

「ジュリアーー！」

しばらく、ベットの上に座つたままぼーっとしていた所に、慌ててクラウス様が部屋に入ってきた。

「・・・クラウス様」

その場に立ちあがり彼を迎えようと彼の元まで行く前に私は彼の腕の中に収まっていた。

「クラウス様？」

「・・・すまない、ジュリア。あの人気がここまで来るとは思つていなかつた。未だ国に滞在していた事で、今回の事が彼の耳に入つてしまい、君を見舞いたいと言うから了承したが・・・まさか、ここにくるなど・・・くそつ！こんな事になるならあの時君を出すべきじやなかつた！！」

頭の上から悔やんでいるような声でそう話すクラウス様の腕は更に力が入り私を強く抱きしめる。

あまりの強い力に少し苦しくなつた私は彼の名を呼んだ。

「・・・ク、クラウス様」

彼の名を呼ぶと彼はハツとしたように私を拘束していた腕を緩め両肩を掴まると彼の胸から解放された。

「…………すまない」

目を伏せて謝る彼をみて、なぜかトレース陛下の言葉が蘇った。

「…………私に何か黙っている事があるのですか？」

無意識のうちに言葉が零れていた。

だけど、その言葉を聞いたクラウス様は目を見開いた様に私を見た。

「…………何か、聞いたのか？」

先程までとは全く違う低く唸るような声に思わず肩が強張る。

「い、いいえ…………。ただ、貴方が私を騙していると…………」

クラウス様の鋭い視線に耐えきれなくなり思わず顔をそむけてしまった。

「…………ジュリア、その言葉を信じるのか…………？」

「…………わからないんです。私…………信じたくないのに、なぜかトレース陛下の言葉が引っ掛かってしまう…………」

今の気持ちを正直に話す。

彼はきっと眉を寄せて私を見ているのだろう。

はっきりとその表情を見る事は出来なかつたが…………。

「…………ジュリア、私を信じてくれ。君を騙してなどはない…………。ただ…………まだ告げられない事はある…………。しかし、時が来たら必ず、君に伝えるから」

ふと、肩に置かれていた手のぬくもりが消えた。
顔を上げて見ると、そこには悲しそうに笑うクラウス様の顔があつた。

「ク・・ラウス・・さ・・・・ま？」

私の問いかけにハッとしたように再びいつもの笑顔を取り戻して私は笑いかけた。

「そりいえば、先程医師から連絡があつてリアーシャが目を覚ましたそうだ。・・・まだ、誰とも会う気はないといつてているが、近いうち君にも会えるように話をつけてみるよ」

リアーシャ様の話をされて、ほつとしたのも束の間、やはりまだ私は会いたくないのだという想いで再び胸が苦しくなった。

「・・・そんな顔をしないでくれ。・・・彼女だって本当は・・・」

クラウス様は何かをつぶやいて目を伏せた。

「クラウス様？」

なんだか情緒不安定の様に先程から沈んでいる。

私に見せてくれる笑顔が本当のものでないことも気づいているが、今はまだ言えないという彼の言葉にこれ以上私も何も言えない。それに、今はリアーシャ様の事も気になってしまつ。

「・・・とにかく、今はゆっくりと休みなさい。君までも倒れてし

まつては大変だからね」

そういうて額に脣づけを落とすとクラウス様は再び部屋を後にした。静まりかえった自室を見回して、溜息が零れる。

「・・・やはり、私がここにいるからこんなことが・・・」

誰にも聞かれていないとと思うと本音が零れてしまう。以前はクラウス様の想い人と幸せになつてほしいと思いつこを出した。だけど、私が戻るとまた再びこんな事になつてしまつ。まるで、私が不幸を連れてきているみたいに・・・。そんな考えが浮かんではそれを思いどどまり自分に言い聞かせている。

「・・・リーアーシャ様・・・クラウス様・・・」

大好きな2人が傷つくのであれば、やはり私はここにいては・・・。そう思い、先程のトレイス陛下の言葉が浮かんでくる。

『あなたが、この国を出ていきたいと思つた時、私はいつでもあなたをお迎えしますよ』

緑の多い国フィーナ国。

祖国の様な雰囲気が心を和らげてくれる。

ただ、トレイス陛下の最近の様子がおかしい事に少し戸惑いを覚える。

結婚当初に訪れた時はとても気さくで、クラウス様とも兄弟の様に仲が良かつたように見えた。

それなのに、今回この部屋に乗り込んできたことも、私へ云つた言葉も今までのトレイス陛下の面影は全くなかつた。

「……私が何も知らないだけで、本当は周りで何か起こっているの……？」

その言葉に答えをくれるものはいなかつたが、なぜかそれが正しい気がしていた。

しかし、今は精神的にも体力的にも疲れており、いつの間にかベッドの上で眠りについていたのだった。

2.1 (後書き)

す、すみません・・・。
ちょっと行き詰まり中のため、のろのろ更新です。
しかも文も乱れまくり・・・。
後日ちよこちよこ改稿しながら改めて行きますので、多少の乱れは
目を瞑つて頂ければ・・・っ!!

幕間 ～クラウス視点～

ジュリアの部屋を出ると思わずため息が零れた。

「・・・・次から次に・・・・

問題ばかりが起こる。

事の発端は彼女がフイーナ国へ行つた事だつた。
彼女が今まで何かを隠していた事は知つていた。

だが、いきなり離縁を申しだされ国を出たいと言われた時には心臓
が止まるかと思つた。

まさか私がリアーシャを好きだと勘違いしていたとは思わなかつた。
その事でこの1年彼女を苦しめていたと思つと心が痛む。

「だが、よつともよつて・・・・・

私は今しがた彼女の部屋に訪れたと言つアイツの顔を思い出し再び
腹が立つてきた。

彼女がフイーナ国へ行つた後すぐ、アイツから書状が送られてきた。
それもたつた2行の書状だ。

見つけたぞ！

まさか、お前が隠していたとはな。

その書状を読んでもすぐにジュリアを呼びもどす事にした。
しかし、彼女は離縁を望んでいて素直に戻つてくるとは思えず、必

ず戻つてくる手段として側室の舞踏会と称して。

この時だつて、私は知らず知らずのうちに彼女を傷つけていたとは露知らず。

それでも、何とか誤解は解け彼女は私の気持ちを信じてくれた。ただ一つ、彼女に嘘をついてしまつたが……。

彼女は覚えていない。

幼いころにお互いに共有した秘密。

『この事は誰にもいわないで……』

今にして思えばとても重大な、隠していてもいいのかと思つほどいの秘密だ。

「……バレてしまえば、色々厄介な事になる……」

ぽつりとつぶやいた言葉とともにうかんべぐる顔は長年兄として慕つていた顔だ。

その昔、王族として他国との外交も含め色々な国へと赴いていた。そこで、よく顔を合わせていたのが同じような状況だったアッシュだつた。

ある国に訪問した時も同じように訪れていたあいつと、いつそりと城を抜け出し町に繰り出した。

そこで、ある女の子と出会つた。

彼女は町のはずれの小高い丘に立つていて木の傍で泣いていた。

私たちはいつもなら気にせず通り過ぎていたのに、なぜかその時はお互い何も言わず彼女の元へと近づいたのだ。

彼女は、傍に寄ってきた私たちに驚いて顔上げた。

・・・その時の顔は未だに忘れられない。

幼いながらも整つた顔立ち。

涙にぬれた大きな瞳がまるで輝く星のようにきらきらしていた。小さな手はその涙をすぐに拭きとるといままで泣いていたとは思えないほど気丈な声で私たちに声をかけた。

「貴方達はどなた? ここは公爵家の敷地だと存知ですか? 今すぐ出て行かないと人を呼びますよ?」

自分たちよりも小さなその女の子はちゃんと自分の立場を理解し、私たちを牽制してきたのだ。

まだ、6つか7つだろう女の子に言われた私たちは目を丸くし、うつかり大笑いしてしまった。

その事に機嫌を悪くした彼女をその後宥め、私たちは公爵の客だと説き伏せ、彼女の涙の理由を尋ねた。

だが、彼女は涙の理由を語らなかつた。

そんな彼女に興味をもつたのは私だけではなくあいつも一緒だつた。滞在中、時間をみつけては2人で彼女に会いに行つた。

アイツが、彼女をからかうと彼女は小さな頬を膨らまし怒つた。そんな彼女を私が慰め皆で笑い合つた。

たのしい時はアツと言う間にすぎ私たちは国に戻らなければいけない期限が迫つていた。

「・・・こんなに笑つたのは久しぶりだ」

あこつせわつ言つて愛おしそうに彼女を見つめた。

「・・・俺は必ず彼女を迎えて来る」

そう言い残すと一足先にあいつは国に帰つていった。
その時は、まだまだ先の事だと笑つた。

だけど、再び彼女の涙を見てしまい私は彼女を守りたいと強く思つた。

そして、その想いを彼女に告げた。

「・・・俺は君と結婚したいんだ」

涙でぬれた彼女は首を振つた。

「・・・私はこの世界にいてはいけない人間なんです・・・」

「・・・クラウス様」

ふと思考が遮られ、声がした方を向いてみるとそこにはアルが立っていた。

「どうした?」

「イングラン・シャーリー・アーチャー様が、到着されました」

頭を下げる。「アルに頷き私は彼女に会つ為、執務室を後にした。彼女に似た顔を思い出しながら、アーチャーの待つ応接間へと入る。

「……久しいな」

「（）無沙汰いたしております。この度はとんでもない（）招待誠にありがとうございました」

そう言つて頭を上げた彼女の顔をにっこりと王女らしい顔で笑っていた。

「……そう言つてくれるな。私はアーチの為ならなんでもする」

「……だからといって、私を側室にするなどとは勘弁して頂きました」

呆れたように溜息をつくローラー・シャーに私は返す言葉もなく、ソファに腰掛ける。

「はあ……あなたは相変わらずジュリアにメロメロなんですね。まあ、いいですわ。最近ジュリアにさけられているのではないとかと不安になつておりました。ジュリアに会えるのであれば協力いたしますが、私の結婚式には必ずジュリアを連れてくると約束して下さいね？」

彼女の今回の訪問は、我が国の舞踏会の招待と（）ことで来てもらつていた。彼女の結婚報告も兼ねて。

そんな他国の姫をまわかにこんな状況に突き合わせるなど語道断と言われても仕方がない。

だが、頼めるものは彼女しかおらず、本当に側室を設けるなどそんな事は考えてもない。

そんな彼女からの申し出を断る事などできるはずもなく、

「……わかつておる、一しゆ……」

「もちろん、その後1カ月は滞在しても構いませんから。」

私が言葉を紡ぐ前に、きつかりと期限を言つ渡されてしまいおもわず眉間にしわが寄る。

「1年もまともに会えていませんのよ、当然ですね?」

そういわれしづしづ頷くしかなかつた。

舞踏会はもちろん公式なものではなく、親しい友人たちとの舞踏会にするつもりだった。

アイツが、舞踏会に参加すると言つてくるまでは……。

その為に至急リアーシャにこんな事を頼まなければいけなくなつた。ジユリアを伴つてやつてきたアイツを見た時には腸が煮えくりかえりやうだった。

そして、舞踏会が終わリアイツは私の部屋へとやつて来て言つた。

「……他国の姫をこんな事に使つていいのか?……」

そのひと言で、アイツが何を言いたいのかわかつた。

「だが、お前とは親しい付き合いだしな。黙つてやるからしつか

りやり通すんだな

・・・・思わず手が傍にある剣に伸びそうだった。
あいつはこの舞踏会が嘘である事を見抜いていた。
アイツが一体何を企んでいるのか。
一体、ジュリアをどうするつもりなのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3190w/>

王妃の秘密

2011年12月19日19時52分発行